

[3] コーサンビーの王族と仏教

[0] 以上のように、釈尊が初めてコーサンビーを訪問されたのは、舎衛城に仏教がもたらされたよりも後のことで、阿難が秘書室長に任命されたよりも後のことではないかと考えられる。

しかしながら仏教は必ずしも釈尊自身によってでなくては布教されえないということはなく、また仏教が広くその地域に受容されるためには、その地域において影響力をもつ有力者が仏教に帰依することが大きな条件の一つであって、当時において有力者の筆頭は王（政治的権力者）であったから、コーサンビー王室と仏教の係わりも考えておく必要がある。そこでここでは当時のコーサンビー王とその関係者たちとの仏教の関係を調査し、釈尊の生涯や釈尊教団の形成史について考えてみたい。

[1] まずはじめに、A 文献と B 文献にともに登場するコーサンビーの王室に関係する人物を紹介しておこう。漢訳名は原語にさかのぼって追跡できないものもあるが、文脈からそれと知られるものは同定した。

[1-1] まず釈尊時代のコーサンビーの国王はウデーナ (Udena) であって、サンスクリットではウディヤナ (Udyana) であり、優填、憂陀延、優陀延、優陀延那、日子などと漢訳される。

その妃には数人が知られるが、一人はサーマーヴァティー (Sāmāvati) であって、漢訳には舎彌婆提、舎彌、舎摩、舎摩嚩底、奢摩嚩帝、奢弥跋提、紺容、該容などが知られる。

もう一人の妃はマーガンディヤー (Māgaṇḍiyā) であって、比類なき美しさであったがゆえに無比 (p. ; Anopamā, skt. ; Anupamā) とも呼ばれ、漢訳では阿奴跋摩照堂、帝女、無比摩建彌迦、摩因提女、摩回提女、妙容などが知られる (1)。

そしてサーマーヴァティーの侍女としてクツジュッタラー (Khujjuttarā) が登場する。サンスクリットではクブジョータラー (Kubjottarā) で、漢訳では拘讎多羅、久寿多羅、酤没儒怛囉、曲背女、度勝である。

そしてパーリの B 文献では、ウデーナ王にもう一人のヴァースラダッター (Vāsuladattā) と呼ばれる妃があったとされる。A 文献にはこれに相当する固有名詞は登場しないが、「王女」とされるものがあり、文脈からはこれに相応すると考えられるので、これも取り上げる。

またサンスクリット系の B 文献には、シュリーマティーというこれまたウデーナ王の妃が登場する。これは吉祥慧と訳されているが、漢訳の A 文献にはこれに相応すると考えられる善意王女、威徳なる妃が登場するので、これも併せて紹介する。

(1) 摩因提、摩回提の「因」と「回」は、いずれかが誤記であろう。

[1-2] また B 文献資料によれば、A 文献に登場するボーディ王子 (Bodhirājakumāra) がウデーナ王の息子とされるが、これから紹介する資料の中ではただ名前のみが記されるのみで、王室の中の登場人物としての役割を演じることはない。したがって本当にコーサンビーの王室に関係があった人物であるかどうかということから調査しなければならないが、これも併せて考察する。

またウデーナ王と密接に関係する比丘にピンドーラ・バーラドヴァージャ (Piṇḍola-

bhāradvāja) がいるが、これはコーサンビーの仏教としては別の主題になるから、これは節を改めて考察することにした。

[1-3] 以下、上記人物別にその資料を紹介するが、一つのエピソードに複数の人物が登場することが多いので、一つの文献をいくつかに分割することになったことをお断りしておく。また分割できないものは2人を併せて紹介する。

なおこれら登場人物は、文献によってさまざまに表現されていてわかりにくいので、本文中にはそれぞれ、パリー語による名前をカタカナ表記にして示し、カッコの中でその文献で使われている名前を記すことにする。逆に上記以外の人物・地名については、当該の文献に使われている用語を出し、原則としてそのパリー名をカッコのなかに記す。また一つの資料に最初に登場する人名の下には実線のアンダーラインを、後に考察の材料となる記述については、文章の下に破線のアンダーラインを付しておいた。

[1-4] 以下には、[2] でウデーナ王資料、[3] でサーマーヴァティー王妃資料、[4] で侍女のクツジュッタラー資料、[5] でサーマーヴァティーとクツジュッタラーが係わりあっている資料、[6] でヴァースラダッター王妃資料、[7] でマーガンディヤー王妃資料、[8] でサーマーヴァティー王妃とマーガンディヤー王妃が係わりあっている資料、[9] でもう一人の王妃と考えられるシュリーマティー資料の順に紹介し、若干の考察を加えていく。

[2] まずウデーナ王を主な登場人物とする資料を紹介する。

[2-1] A文献資料には次のようなものがある。

(1) ある時ピンドーラ・バーラドヴァージャはコーサンビー国のゴーシタ園に住していた。ウデーナ王がピンドーラ・バーラドヴァージャの所へ詣り、「比丘らは年若く、盛年期の身にあるにかかわらず梵行を修そうとするのはどういう理由であるか」と訊ねた。バーラドヴァージャは世尊の教えとして、女には母の心、姉妹の心、娘の心を起こすべきこと、女の身体には不浄なもので満ちていること、眼・耳・鼻・舌・身・意の感官を制御すべきことを説いた。王は身・語・心を守らず後宮に入るときには欲念に支配されるが、身・語・心を守って正念にして後宮に入るときには欲念に支配されることはないと言ひ、仏法僧に終生帰依する優婆塞となった。SN.035-127 (vol. IV p.110~113)

(2) ある時ピンドーラ(賓頭盧)は拘睺彌国瞿師羅園に住した。その時婆蹉国王ウデーナ(優陀延那)は賓頭盧の所に詣り、「新学の年少比丘が出家して間もないのに、どうして安楽に住して諸根が清らかであり、梵行を修することができるのか」と尋ねた。賓頭盧は世尊の教えとして、女には母の心、姉妹の心、娘の心を起こすべきこと、女の身体は不浄なもので満ちていること、眼・耳・鼻・舌・身・意の感官を制御すべきことを説いた。王は身を守らず諸根を守らないときは欲望に身を焼かれるが、身を守り諸根を守るときには内宮にあっても身を焼かれることはないと言ひ、歡喜隨喜して立ち去った。『雜阿含』1165 (大正02 p.311上~中)

(3) 私の弟子中の第一優婆塞にして、至心に佛に向いて意不變易なるは所謂ウデーナ(優填)王である (1)。『增一阿含』006-003 (大正02 p.560上)

(1) 他に上げられている人物は、「惠施を好喜するは所謂毘沙王なり。所施狭少なるは光明王

なり。善本を建立するは王波斯匿なり。無根善信を得、歡喜心を起すは所謂王阿闍世なり。正法を承事するは所謂月光王子なり。聖衆に供奉し意恒に平等なるは所謂造祇洹王子なり。常に彼を濟するを喜び己の為にせざるは師子王子なり。善く人に恭奉し高下有ること無きは無畏王子なり。顔貌端正にして人のために殊勝なるは所謂雞頭王子なり」などである。

〈4〉 釈尊が拘深（コーサンビー）・瞿師（ゴーシタ）園の過去四仏の所居の処におられた時、ある比丘が舎衛城での雨安居を終えて、釈尊に会うために虚空を飛んで拘深園に來た。比丘が（釈尊に会う前に）拘深園に坐していると、サーマーヴァティー夫人（舎彌夫人）が五百女人とともにそこに至り、その比丘を敬うた。それを見たウデーナ王（優填王）が怒って比丘を損なおうとするが、サーマーヴァティー夫人に制止された。王は答えいかんによっては比丘を殺害しようと考えて比丘に禅中間事を問うが、比丘は黙して答えず、樹神が王の注意を引いている間に比丘は釈尊のいる瞿師園に行った。釈尊は比丘に対して王に法を説くべきであったと説かれた。『増一阿含』031-002（大正02 p.667上～668上）

〈5〉 仏は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき波斯匿王、毘沙（ビンビサーラ）王、ウデーナ王（優填王）、悪生王、優陀延王⁽¹⁾の5人の王が一処に集まり五欲について議論したが、各王とも主張が異なるので、波斯匿王は他の王を率いて釈尊のもとを訪れた。釈尊は「欲意が熾盛なる時、欲する所必ず克つべし、得おわって倍す歡喜し、所願に疑い無し、彼此の欲を得るを以て、貪欲の意は解けず、此れを以て歡喜をなす、之に縁って最も妙となす」という偈を唱えられ、「色に執着する者は色を最も妙とする。同様に、声に執着する者、香に執着する者、味に執着する者、細滑（触のこと）に執着する者は声、香、味、細滑を最も妙とする。それ故に、色に執着する者は色を厭い、色に於て出要するならば、涅槃の城に至ることができる。これと同様に、声に執着する者、香に執着する者、味に執着する者、細滑に執着する者は、各々声、香、味、細滑を厭い、出要するならば、涅槃の城に至ることができる」と説かれた。『増一阿含』033-001（大正02 p.681下～682上）

(1) 『赤沼辞典』p.699は「優填王と優陀延王とを別人の如く記せども恐らく同名の別音写ならん」とするが、水野弘元氏は「優陀延王は蘇尾羅國王 Rudrayana を指したものである」とする（「初期仏教の印度に於ける流通分布に就いて」『仏教研究』7巻4号 昭和19年2月）p.23。本論文にはあまり重要ではないので、取りあえず優填王をウデーナとしておく。なお「悪生王」はウツジェーニーの Caṇḍapajjota 王をさすか。

〈6〉 仏は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき生漏梵志が釈尊のもとにやって来て、「どのような因縁や宿行により、人民の類が荒廢するのか」と質問した。釈尊は「人民の所行が非法だと荒廢する。即ち①人々が慳貪となること、②風雨による植物の自然災害を受けること、③人々が互いに諍い競って自らの命を失うこと、④武力によって国が乱れること、⑤困厄疾病によって国土が荒廢することである」と説かれた。この教えを聞いた梵志は、「もし私が乘象騎馬しているときは波斯匿王、頻婆娑羅王、ウデーナ王（優填王）、悪生王、優陀延王の梵福を受けようとしています。しかしもし私が偏袒右肩しているときは、私の礼拝を受けて下さい。もし私が歩行しているときに瞿曇に会ったならば私は履を脱ぎましょう」と言って、歡喜踊躍して釈尊に歸依して優婆塞となった。『増一阿含』034-010（大正02 p.697下～698中）

〈7〉 そのとき釈尊は 500 人の比丘たちと共に祇樹給孤独園におられた。ときに帝釈天が釈尊のもとに現れて、「三十三天にいる如来の母のために、説法されるように」と告げた。釈尊はこれを黙然として受けられた。そのとき難陀竜王と優槃難陀龍王が閻浮提を火事にした。阿難は釈尊にこの因縁を尋ねると、釈尊は「龍王の瞋恚によるものである」と答えられた。そこで摩訶迦葉、阿那律、離越、摩訶迦旃延、須菩提、優陀夷、娑竭陀は「龍王を降伏したい」と申し出るも、釈尊は「凶悪であるから教化するのは難しい」と退けられたが、目連には許可を与えられた。彼は須弥山にいる龍王のもとに行って教化し、龍王を連れて釈尊のもとに戻って来た。人の姿となった龍王は釈尊に帰依し、優婆塞となった。そのとき波斯匿王は火事となった因縁を尋ねるため、釈尊のもとを訪れた。龍王は王の殺意を感じて、祇樹給孤独園に遠からぬところに立ち去って出現しなかった。王はこの 2 人を臣下に探索させたが、見つけることができなかった。龍王は王に対して瞋恚を起し、害そうとするが、釈尊に命じられた目連がこれを止めさせた。ときに王は珍宝や飲食を施するために釈尊のもとを訪れた。釈尊は王に「朝、去って行った 2 人は龍で、王の殺意を感じて害そうとしたが、これを目連が止めさせたのだ。それ故に目連に与えるように」と告げられた。この間の事情を知った王は釈尊と目連に感謝の意を表して立ち去った。

ときに釈尊は四衆に告げずに独り、祇樹給孤独園から三十三天へ行かれた。帝釈天は釈尊が来られたことを知って出迎えた。ときに如来の母摩耶が天女を引連れて釈尊のもとにやって来た。釈尊が三論（戒論、施論、生天論）、四諦の教えを説かれると、法眼浄を得た。このとき帝釈天は人間の時節で人間の飲食を施した。ときに波斯匿王とウデーナ（優填）王が阿難のもとにやって来て、「今、釈尊はどこに居られるのか」と質問したが、彼も分からなかった。ウデーナ（優填）王は「釈尊に会うことができれば、命終してもよい」と考えていた。そこで王は臣下の進言により牛頭施檀で 5 尺の形像を造って供養していた⁽¹⁾。これを聞いた波斯匿王も紫磨金で 5 尺の形像を造って供養した。また四衆の人々は阿難と阿那律のもとにやって来て釈尊の所在を尋ねたが 2 人とも分からなかった。釈尊は 3 ヶ月を経たところで神足を捨てられ、声聞らに三十三天の善法講堂にいることを告げられた。これを知った阿那律と阿難らは目連に「釈尊が再び戻られるように」と依頼した。そこで目連は三十三天に行ってこれを告げた。釈尊は「7 日後、僧迦尸の大池の側に行くように」と告げられた。これを聞いた四部衆、並びに波斯匿王、ウデーナ王（優填王）、悪生王、優陀延王、頻婆娑羅王は大歡喜し、これらの人々と迦毘羅衛城の人々らは釈尊の降下されるころへと向った。

7 日の初めに釈提桓因は自在天子に命じて須弥山の頂きから僧迦尸の大池に至る 3 つの道を造らせた。このとき釈尊は「五盛陰は苦である。これを滅すれば、涅槃の道の有ることを知る」と説かれ、「若し能くこの法に於て、懈怠すること無くば、便ち生死を尽すべし」という偈を唱えられた。『増一阿含』036-005（大正 02 p.703 中～707 下）

(1) 『西域記』（大正 51 p.889 中）には次のようにいう。「奢羯羅故城の中に一伽藍あり、僧徒百余人が小乘法を学んでいる、世親菩薩が昔この中で勝義諦論を作った。その側に窣塔

婆あり、高さ二百余尺、過去四仏はここで説法した。又、四仏が経行した遺跡がある。伽藍の西北五六里に窣塔婆があり、高さ二百余尺、無憂王の建てたものである。……。新都城の東北十余里で石窣塔婆に到る、高さ二百余尺、無憂王の建てたものである」。

また『西域記』（大正 51 p.945 中）では、「戦地より東へ三十余里行き憍摩城に到る。彫檀立仏像あり、高さ二丈余り、甚だ靈応多く、時には光明を燭す。疾病あるときその痛い処に随い金箔を像に貼れば即時に回復する。心を虚に願を請うもの多く、要求が遂げられるという。その土地の人に聞くと、この像は昔仏在世の時、橋賞弥国の鄔陀延那王が作ったものという」。

〈8〉 仏は舍衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき多数の比丘たちが普会講堂に集まって、「今、舍衛城では乞食が得難い。順次、一人ひとりが乞食しよう」とか、ある比丘は「摩竭提国で托鉢しよう」「いや、父王を殺し、提婆達多を友とする阿闍世王の治世だからやめるべきだ」とか、あるいは「拘留沙国で托鉢しよう」「いや、悪生王は兇悪である」とか、「拘深波羅捺城、ウデーナ（優填）王所治之處、篤信仏法意不移動。我等宣在彼土乞食」などと論議していた。これを天耳を以て聞かれた釈尊は講堂に趣かれ、比丘たちに「国を称讃するな。王の優劣を論ずるな」と教誡され、「それ人が善悪を作さば、行の本に所因有り、善を為さば善報を受け、悪には悪果報を受けん」という偈を唱えられた。そして「①少欲知足、②勇猛心、③多聞、④人の與に法を説くこと、⑤恐れ無く恐れること無きこと、⑥戒律具足、⑦三昧成就、⑧智慧成就、⑨解脱成就、⑩解脱見慧成就に関して論ずべきである」と説かれた。『増一阿含』047-006（大正 02 p.782 上～下）

〈9〉 世尊が拘睺弥に住しておられたとき、勇猛なる大臣が出家したので、ウデーナ（憂填）王が婦と田地を与えるから還俗せよと勧めた。この比丘の問いに仏は「もし、この難事あれば便ち応に去るべし」と言われた。『四分律』「安居健度」（大正 22 p.834 上）

〈10〉 世尊は拘睺弥の瞿師羅園に住しておられた。王ウデーナ（憂陀延）⁽¹⁾は跋難陀釈子と親友で、夏安居を請うた。ところが他の場所で豊かな供養があると聞いて、他に移ってしまった。世尊はこの因縁により「夏安居を失う」と制された。『四分律』「安居健度」（大正 22 p.835 上～下）

(1) Vinaya はコーサラ国波斯匿王、『十誦律』は舍衛城とする。

〈11〉 世尊は拘睺弥⁽¹⁾に住しておられた。ウデーナ（優填）王は跋難陀と親厚で、王が招待して夏安居に入った。ところが他の住处に住した比丘たちは多くの衣を得たと聞いてそちらに移り、また帰ってきた。釈尊は「両方の処を失う」と説かれた。『四分律』「房舎健度」（大正 22 p.944 中～下）

(1) Vinaya は舍衛城とする。

〈12〉 世尊は拘睺弥におられた。ウデーナ（憂陀延）王は賓頭盧の親しい知識であったので毎朝訊問した。そのとき不信樂の婆羅門大臣があつて、賓頭盧が立って迎えないことをなじり、もし立って迎えないなら命を奪えと入れ智慧した。賓頭盧はその心を知つて、もし立って迎えないければ自分を殺し、王は地獄に落ちるだろう、しかし立って迎えれば位を失うだろうと予知し、立って迎え、このわけを話した。『四分律』「雜健度」（大正 22 p.961 中）

[2-2] B 文献資料を紹介する。

(1) むかし Allakappa 国 (raṭṭha) の Allakappa 王と Vethadipaka 国 (raṭṭha) の Vethadipaka 王とは少年時代から親友で同じ先生の下で教育を受け、それぞれ父王の死後王位を継いだ。そしてこの世の無常を感じ共に王位を息子に譲り、ヒマラヤ地方に隠棲した。Vethadipaka は先に死んで、天子に生まれかわって Allakappa を訪ねた。Allakappa が象の糞害に悩まされていることを告げると、Vethadipaka は象を惹きつけるための琵琶 (vinā) を与え、3種の弦の弾き方と呪文 (manta) を教えた。

その時 Parantapa がコーサンビーの王だった。ある日妊娠中の夫人は王と一緒に戸外で赤いマント (kambala) を纏い、王の指輪 (muddika) をはめたり外したりして戯れながら日光浴をしていたところ、巨大な鳥が肉片と間違っただけに彼女に飛びかかり連れ去った。ヒマラヤ地方のニグロード樹の枝に下ろされた時、彼女は大声で叫び巨鳥を追い払った。日没時、陣痛が始まり、同時に嵐となったが、夜明けとともに晴れその時子供が生まれた。雨の季節 (megha-utu) と、山の季節 (pabbata-utu) に、明け方 (aruṇa-utu) に生まれたので、彼女は息子を Udena と名づけた。この樹から遠からざる所に修行者 (tāpasa) Allakappa の住所があった。彼は雨の日にはその樹の下で巨鳥が喰った獲物の骨を拾ってスープにして飲むのが常であったので出向いたところ、頭上の枝から赤子の鳴き声を聞いた。彼は赤子と王妃を樹から降ろし、彼の草庵に案内し食事を与えた。王妃は修行者と結婚して子どもを育てた。

ある日修行者は星座を観察し Parantapa の星が隠れるのを見て、「コーサンビーの Parantapa 王が死んだ」と告げた。彼女が泣き出したので訊ねると、「Parantapa は自分の夫である」と答えた。修行者が生者必滅と言うと、王妃は「自分が泣くのは、息子がそこにいれば王位継承権があったのに、いまは一庶民になってしまっているから」と答えた。修行者は「心配なさるな、もしお望みならば自分が必ず王位を継げるようにしてあげよう」と言って、少年に象を惹きつける琵琶を与え、その弾き方と呪文を教えた。少年は教えられた呪文によって集めた象群を引き連れ、象のリーダーの背に乗ってコーサンビーに乗り込み、マント (kambala) と指輪 (muddikā) によって Parantapa 王の息子であることを証明し、王位についた。Dhammapada-A. (vol. I pp.161~169, Burlingame 訳 vol. I pp.247~252)

(2) コーサンビーの町でパラントパ (Parantapa) という王が国を治めていた。王妃は身重で屋上で王と一緒に赤い毛布を着て日光浴をしていた。そのとき大鷲が肉片だと思っただけに彼女を捕まえ、飛び去って、山の麓の樹の枝に置いた。彼女が手鈴 (pāṇissara) で大きな音を出すと鳥は逃げ去り、その場所で彼女は出産した。3日間雨が降ったが、彼女は毛布を着て坐っていた。その時そこからあまり遠くないところに苦行者 (tāpasa) が住んでいて、彼女の声で樹の根元にやって来て、生まれを聞くと助け下ろして自分の住処に連れ帰った。子どもは雨の季節 (megha-utu) と山の季節 (pabbata-utu) に生まれたのでウデーナと名づけられた。苦行者が2人を養ったが、ある日彼女は誘惑して苦行者に戒を破らせ、一緒に暮らすようになった。そして時間が経過し、パラントパ王が亡くなった。彼女と子は王国に傘を上げたい (rajje chattaṃ ussāpetuṃ) と思った。

ところで苦行者は帝釈天のもとで得た象の書と技術 (hatthigantasippa) を知っていた。苦行者はそれを子どもに教えた。彼はその技術を使って象を呼び寄せて背中に乗り、毛布と指輪 (muddikā) をもって都に帰って王位に就いた。MN.-A. (vol.III pp.324~325)

- (3) ヴァツツァ国の首都はカウシャンビーであって、その王家をパーンダヴァといった。この王家にシャターニカを父とし、ヴィシュマティーを母として生を受けたサハスラーニーカ王は、アヨーディヤーのクリタヴァルマン王の王女ムリガーヴァティーと結婚した。ある日身ごもったムリガーヴァティーは血を満たしたような真っ赤な水を満たした桶の中で水浴びしていたとき、ガルダ鳥が王妃を生肉だと思って東方の山に連れ去った。しかし彼女が生きているのを知った鳥は、彼女をおいて飛び去った。これを助けたジャマダグニ仙に、やがて夫に会えるだろうと励まされて、彼女は男の子を生んだ。その時天から、「ウダヤナという吉祥王が生まれた」という声が聞こえた。母ムリガーヴァティーはサハスラーニーカ王の名を刻んだ腕輪をこの子にはめさせた。

あるときウダヤナが鹿を追っていたとき、森の中で1匹の蛇を持ったシャヴァラ族の男に会い、腕輪と交換にこの蛇をもらって放してやった。蛇は弦の音色美しい琵琶と蒟醬と凋むことのない花輪の作り方と永久に消えない印を額に付ける技術を教えて去っていった。一方シャヴァラ族の男は市場で王の名を刻んだ腕輪を売ろうとしてつかまって、王はムリガーヴァティーと息子が生きていることを知り、ジャマダグニ仙のところに迎えに行った。『カターサリットサーガラ・ウダヤナ王行状記』(岩本裕訳『カターサリット・サーガラ』1、岩波文庫 1954.1 pp.014~022)

- (4) ピンドーラ・バーラドヴァージャはいつもコーサンビーのガンガー河の岸辺にある水林 (Udakavana) というウデーナ王の庭園に行って昼の坐禅をするのが習わしであった。ある日ウデーナ王も園遊に行き遊び疲れて一人の女の膝に頭をのせて眠った。他の女たちはピンドーラの話に喜んでいるのを知り、怒って「何のために来たのだ」と聞いた。ピンドーラは「遠離のためです (vivekattham) 」と答えた。王は「お前の遠離を話せ」と言ったが、彼は王がこれを知ろうと質問しているのではないと考えて答えなかった。王は「語らないなら赤銅色の蟻 (tambakipillikā) にお前を噛ませるぞ」と言って、蟻の巣を持ってきた。ピンドーラは王が私に対して罪を犯すならば悪趣に向かう (apāyābhimukha) であろうと考えて、神通力によって空に上った。王は過ちを知って、別の日にピンドーラのところに行き帰依した (saraṇam gato ahoṣi) 。
- Suttanipāta*-A. vol.II (pp.514~515)

- (5) 上座ピンドーラはある日舎衛城に乞食に行き、食事をした後の暑いときに、涼しい場所で日中を過ごそうと空を飛んでいって、ガンガー河の岸辺にある水林 (Udakavana) というウデーナ王の庭園に行き、木の下に坐った。王もまた園遊して疲れて眠った。目覚めた王は女たちが自分を放り出してピンドーラの話に喜んでいるのを知り、怒って「赤銅色の蟻 (tambakipillikā) にお前を噛ませるぞ」と言って、蟻の巣を持ってきた。上座は王の邪悪な状態を知って、神通力によって空に上った。王は自分の過ちを知って、園丁に上座が来るときには知らせるように命じて、知らせ

があったときに行き、ピンドーラに帰依した。SN.-A. (vol. II pp.393~396)

- 〈6〉 ピンドーラ・バーラドヴァージャは祇園精舎から空中をコーサンビーに赴き、ウデーナ王の園へいつも昼間の暑さを凌ぎにいっていた。ウデーナ王が園へ行き昼寝から目覚めた時、侍女たちは長老の法話を聞いていたので怒って、「この修行者を赤蟻に食べさせよう」と赤蟻の入った函を長老の体のうゑに開けて、ピンドーラを殺そうとした⁽¹⁾。 *Jātaka 497 Mātāṅga-j.* (vol.IV p.373)

(1) 『雑宝蔵経』(大正 04 p.459 下)；優填王子沙羅那が、出家学道頭陀苦行、山林樹下坐禪繫念のとき、悪生王が危害を加える話となっている。

- 〈7〉 牛臥苾芻 (ピンドーラ・バーラドヴァージャをさすものと思われる)は憍閃毘国の水林山の王園中の猪坎窟中に住していた。あるときウデーナ王 (出光王)はこの王園に内宮を率いて遊びに来ていたが、遊び疲れて眠ってしまった。そのとき宮人たちは鬚髪長く、ぼろぼろの衣を着て樹下で坐禪をしている牛臥比丘を見てびっくりして、「大王よ、鬼あり、鬼あり」と騒いだので、苾芻は猪坎窟に入った。王はこの声で目覚めて、剣を取って窟のところに行き、「汝は何者か」と尋ねた。苾芻は釈子沙門であると答えたので、「汝は阿羅漢を得ているか、不還・一來・預流果を得ているか」とさらに尋ねると、いずれも得ていないという。そこで王は怒って、「凡人にして我が宮女を犯そうとしたのだな。大蟻が填满する窟中に入れて噛み殺させん」と言った。これを旧住の天神が聞いて助けようと、自分が猪となって窟より走り出した。王がこれを追って行っている間に、宮女たちは「聖者よ去りなさい。王は極めて暴悪だから、あるいは害するであろう」と逃がした。釈尊は室羅伐城に帰った苾芻を呼び出して、この顛末を聞かれた後、「長髪であってはならない」と定められた。『根本有部律』「雜事」(大正 24 p.218 中~219 上)

- 〈8〉 仏は舍衛国祇樹給孤独園におられた。その時一比丘 (ピンドーラ・バーラドヴァージャをさすものと思われる)が句參(コーサンビー)国の石間土室中にいて鬚髪爪は長く、壞衣を着ていた。時にウデーナ王 (優填王)は美人妓女を従えて遊観に出て我跡山に到った。一美人が山中を散歩してこの比丘を見て、「鬼がいる」と大声で王を呼んだ。王は剣を抜いて「お前は何者か」と問うと、「我は是れ沙門」と答えた。王は侍者に命じ捕縛しようとしたが、山神がこれを救うため大猪に化作し王辺を走ったので、王は猪を逐っていった。その間に比丘は舍衛国祇樹給孤独園中に逃げた。『義足経』(大正 04 p.175 下~176 上)

- 〈9〉 むかし千福王の子のウデーナ (優陀延)は王の位を嗣いで拘舍弥(コーサンビー)城に住していた。その城はゆたかで風光明媚であった。ウデーナは形貌端正で、呪象をよくし、また弹琴が上手で、絵を描くことにも優れていた。時に輔相の子があつてピンドーラ・バーラドヴァージャ (賓頭盧突羅闍)といい、智慧聡明で出家して果を具足し、親党を教化しようと拘舍弥城に還ってきた。それを知った王は喜んで会いに行った。尊者は一切は無常、五欲は衆苦の本、荒野で大悪象に逐われ井戸の中へ逃げ込む譬喩などを説き、王はこれを聞いて起つて合掌五体投地し、懺悔して喜んで宮に帰った。『賓頭盧突羅闍為優陀延王説法経』(大正 32 p.784 下)

- 〈10〉 釈尊は1,250人の比丘サンガとともに、舍衛城から拘藍尼(コーサンビー)国の瞿

師羅（ゴーシタ）の園に遊行された。時の拘藍尼国の王はウデーナ（優填）といい、強暴侵剋し、佞言を開納し、女樂に耽荒し、疑網自沈するような人物であった。また2人の夫人があり、左夫人はマーガンディヤー（照堂）といって人となりは驕傲で、嫉妬深く、人を陥れるような人物で、右夫人はサーマーヴァティ（該容）といって仁愛で清素な人であった。『中本起経』（大正04 p.157中）

〈11〉ウデーナ王は寵愛していた牝象バツダヴァティカーを、年老いて役に立たなくなると顧みなくなったが、世尊に教えられて牝象の名誉が回復された。 *Jātaka* 409 *Dalhadhamma-j.* (vol.III p.384)

〈12〉仏が王舎城におられた時、瓶沙（ピンピサーラ）王は信敬の心篤く常に四事供養していたが、富蘭那等六師の邪教を信服する者も多くいた。王に弟がいて六師を敬奉していて、仏に供養せよとの王命に従わなかった。王が設けた大会において仏は神通力を示し、王弟も仏の説法を聞いて法眼浄を得、六師を尊敬しなくなった。六師は悩み、相談して仏と神通力を競争したいと王に申し出た。仏は王よりこれを聞かれ、毘舍離（ヴェーサーリー）に去られたが、六師も追ってきた。

仏は衆僧とともに拘睺彌（コーサンビー）に来られた。拘睺彌王はウデーナ（優填）といい、群臣を率い奉迎した。六師もまた追ってきて優填王に、「沙門は逃げてばかりなので、王の命で我々と試合をさせて欲しい」と願い出た。……。越祇国屯真陀羅王……特叉尸羅国因陀婆弥王……婆羅捺国梵摩達王……迦毘羅衛国……舍衛国波斯匿王……。 （舍衛国にて大神通を示し六師を降す） 『賢愚経』（大正04 p.360下～363中）

[2-3] 上記A文献資料のなかで、ウデーナ王が釈尊に直接に会っていることを記すのは、〈5〉の「波斯匿王は毘沙王、ウデーナ王（優填王）、悪生王、優陀延王などの他の王を率いて釈尊のもとを訪れた」とするものと、〈7〉の釈尊が三十三天から降られるときに、「波斯匿王、ウデーナ王（優填王）、悪生王、優陀延王、頻婆娑羅王は大歡喜し、これらの人々と迦毘羅衛城の人々らは釈尊の降下されるころへと向った」とするもののみである。およそこれら諸国の大王が一時に釈尊に会うということはなかろうから、これらは単なる伝説の類いと判断すべきであろう。そうするとA文献では、ゴーシタ長者もそうであったように、ウデーナ王が釈尊と直接会見して、教えを受けたとする資料はないということになる。おそらくこれは王と釈尊がそれほど緊密な関係になかったことを示すのであろう。

また上記資料のうちパ・漢に共通する資料水準の高いものは〈1〉〈2〉のみであって、これらはウデーナ王がピンドーラ比丘に、比丘たちが年若くして出家修業する理由を尋ねているから、それほど仏教に理解があった時期のものとは認められない。〈1〉はこのとき王は優婆塞になったとしているが、これはむしろ常套句であって、必ずしも歴史的事実を語るものではないと考えられる。このほか〈4〉は「怒って比丘を損なおうとした」とするし、〈9〉は「勇猛なる大臣に還俗せよと勧めた」とし、〈10〉〈11〉は六群比丘の一人として悪名の高い跋難陀と親密であって、しかも彼は他に王よりも厚遇される雨安居地があったから王との約束を反古にしたというのであるから、これらも王が仏教にそれほど熱い心を持っていなかったことを表しているように考えられる。

しかし〈3〉や〈7〉〈8〉はウデーナ王が熱心な仏教信者として描かれている。しかし

〈3〉〈8〉はごく形式的なものであり、〈7〉は仏像の起源として有名な経であるけれども、説話的色彩が強く、史実を反映しているとは考えられない。

このようにいずれもそれほど高い資料水準のものではないが、ともかくA文献では、ウデーナ王が王の権力や財力をもった仏教の外護者としては描かれていないということができるであろう。次項で考察するようにB文献においても、はじめウデーナ王は仏教にむしろ好意をもっていなかったとされているのは、こうした雰囲気は継承されたのであろう。

なお以下に紹介するようにB文献では、ウデーナ王は象を自在にコントロールできる技を持っていたとされるが、上に紹介したA文献の中にはそれらしき記述は見いだせない。しかし後に紹介する、[6]のウデーナ王の王妃とされるヴァースラダッター資料の中の『四分律』にはこれに関する記述が見られるから、A文献にもこうした伝承がないではないわけである。またMN.085の「菩提王子経」には王子が象に乗り、鉤を使う術に巧みであるとされている。これには相当する漢訳がないが、この象繫がりて菩提王子がウデーナ王の王子とされるとも考えられるので、これについては後に検討したい。

なお〈6〉〈7〉では同時代の有力な他国王（波斯匿王、頻婆娑羅王、悪生王、優陀延王）と併称されており、四大国などに名前が上がることから、強力な王であったといえるであろう。

[2-4] 次にB文献資料を考察してみよう。

〈1〉から〈3〉はウデーナ王の出自を語るものであるが、話の内容からいっても「ウデーナ王説話」とでもいうべきものであって、信じるに足るものではないであろう。しかしここに王が象をコントロールする力を得たことが記されているのは注意しておくべきであろう。

〈4〉から〈8〉はウデーナ王とピンドーラ・バーラドヴァージャの初めての出会いを物語るものであり、細部では相違するが、一つの範疇に属する説話とすることができる。これらによればはじめウデーナ王は仏教にまったく理解がなく、むしろ反感すら抱いていたのであるが、〈4〉と〈5〉では、この王が仏教に帰依するようになったのはピンドーラ比丘によるものとしている。しかし次項に述べるように、王妃サーマーヴァティーを語る資料では、王の仏教帰依はサーマーヴァティーによるものであって、ここにはピンドーラは登場しないから、間接的にはあるが釈尊の教化によることになる。いずれを尊重すべきかは後に検討する。

〈10〉〈11〉はウデーナ王がはじめはけっして立派な人物ではなかったことを語ったものである。これに対して王が熱心な仏教信者であったとするものは〈9〉しかない。

[2-5] 以上のA、B文献のなかにはウデーナ王が熱心な仏教外護者であったとするものもないではないが、しかしそれほど熱心な仏教信者ではなく、はじめはむしろ好意を抱いていなかったとするもののほうが多い。

後に紹介するサーマーヴァティー資料の中には、サーマーヴァティーが熱心な仏教信者であったとする記述の中に、ウデーナ王も釈尊と会っていると推測されるものもあるが、しかしこの項において紹介したウデーナ王が主人公である文献には、B文献においてすらウデーナ王が直接釈尊と会ったとするものはなく、かろうじて〈11〉がそれを想像させるのみである。その外もとより、ウデーナ王が仏教に僧院を寄進したという記述も存しないし、実際にウデーナ王が寄進したとされる歴史的遺物も存在しない。仏典に表れるコーサンビーでの仏

教の活動拠点は、前述したようにもっぱらゴーシタ園であったということを考えると、コーサンビーの仏教の歴史にウデーナ王はそれほど大きな貢献をしていないといつてよさそうである。

[2-6] なおウデーナ王が仏教に帰信したとして、ゴーシタ長者の帰信とどちらが早いということが問題であるが、これはもちろんゴーシタ長者の方が早いとすべきであろう。コーサンビーに仏教がもたらされて以降も、ウデーナはむしろ仏教に好意を持っていなかったということが、何よりの証左である。したがってコーサンビーに仏教がもたらされた貢献者はゴーシタ長者であつて、コーサラ国と同様に、仏教がこの国に定着するようになったのは、王族よりも商人階級の方に功績があつたということになる。なお、ピンドーラ・バーラドヴァージャが王を仏教に帰信せしめたとしても、コーサンビーに仏教をもたらしたのは、やはり釈尊自身であつたということになるであろう。

[3] 次にウデーナ王の王妃であるサーマーヴァティーを主な登場人物とする資料を紹介する。

[3-1] A 文献資料には次のようなものがある。

(1) 比丘らよ、私の弟子優婆夷の中で慈住者 (mettāvihāri) 中の第一はサーマーヴァティーである (1)。AN. 001-014-007 (vol. I p.026)

(1) ここには他に次のような優婆夷が取り上げられている。第一に帰依したスジャーター・セーナニディーター (Sujātā Senānidhitā)、施者中の第一のヴィサーカー・ミガラーマター (Visākhā Migāramātā)、多聞中の第一のクツジュッタラー、禪定者中の第一のウッタラー・ナンダマター (Uttarā Nandamātā)、すぐれた施者中の第一のスッパヴァーサー・コーリヤディーター (Suppavāsā Koḷiyadhītā)、看病者中の第一のスッピーヤ優婆夷 (Suppiyā upāsikā)、不動信をもつ者の中の第一のカーティヤニー (Kāṭiyāni)、信頼すべき者の中の第一のナクラマター居士女 (Nakulamātā gahapatāni)、随聞信を得た者の中の第一のクララ家出身のカーリー優婆夷 (Kālī upāsikā Kurara-gharikā) であつて、サーマーヴァティーはクツジュッタラーの次にあげられている。

(2) 優婆夷の名が列挙される中にサーマーヴァティーがある (1)。AN. 008-009-090 (vol. IV p.348)

(1) ここには 28 人の優婆夷の名が上げられている。その 24 番目がクツジュッタラーであり、25 番目がサーマーヴァティーである。

(3) 久しく信を發して、心に常に慈行を行ずるのはサーマーヴァティー (奢摩嚩帝) 烏波薩吉 (優婆夷) である (1)。憍睺彌城に住す。『阿羅漢具徳經』 (大正 02 p.834 中)

(1) ここには 17 名の優婆夷があげられている。このうちの 8 番目がサーマーヴァティーであり、9 番目がクツジュッタラー (酷没儒怛囉) である。また 10 番目はシュリーマティーと考えられる善意王女である。なお先の 2 人はコーサンビーに住するとされているが、このシュリーマティーは舍衛城である。前項の資料 (8) には「拘深波羅捺城」という句があり、これが何を意味するか分からないが、コーサンビーとパーラーナシーが混同される傾向があるのかも知れない。このようなことと慈行を行じるところから、この資料もここで取り扱うサーマーヴァティーであると判断した。

(4) 我弟子中の聖衆を供養する第一優婆斯はサーマーヴァティー (捨彌) 夫人である (1)。

『増一阿含』007-001~002 (大正 02 p.560 上~中)

- (1) 他に、「初めて道証を受ける第一は所謂難陀難陀婆羅優婆斯である。智慧第一は久寿多羅優婆斯である。如来に供養する第一は所謂摩利夫人である。」などがある。
- 〈5〉世尊はコーサンビーのゴーシタ園に住しておられた。そのときのことでウデーナ王が園遊しているときに後宮に火事があって (antepuram daddham hoti)、サーマーヴァティーをはじめとする 500 人の婦女が死んだ (pañca itthisatāni kālaṅkatāni honti Sāmāvatipamukhāni)。比丘たちの求めに、釈尊はサーマーヴァティーたちのなかには預流果に達した者や、一來果に達した者、不還果に達した者があって、それぞれの果報があると説かれた。 *Udāna* 007-010 (p.079)
- 〈6〉世尊は俱舍彌 (コーサンビー) 国におられた。そのときウデーナ (優填) 王には千人の夫人がおり、一部の 500 人はサーマーヴァティー (舍彌婆提) を首として善好功德があり、一部の 500 人はマーガンディヤー (阿奴跋摩 Anopamā) を首として悪邪不善であった。『十誦律』「波夜提 082」 (大正 23 p.125 下)
- 〈7〉釈尊はコーサンビーに住しておられた。そのときコーサンビー (俱舍彌) 国王の夫人であるサーマーヴァティー (舍彌) が 1500 張の氈を布施した。比丘らは長衣となるからと受けなかった。阿難がそれを釈尊に伝えると、「10 日まで許す」と定められた。10 日たったときどうすべきかを釈尊に問うた。「知識比丘に淨施法をなすか、古いのを捨てて新しいものを受け、10 日に 1 度易えよ」と言われた。『僧祇律』「尼薩耆波夜提 001」 (大正 22 p.292 上)
- 〈8〉釈尊はコーサンビーに住しておられた。そのときコーサンビー (俱舍彌) 国王の夫人であるサーマーヴァティー (舍彌) が 500 張の氈を布施した。比丘らは長衣となるからと受けなかった。阿難がそれを釈尊に伝えると、「10 日まで許す」と定められた。10 日たったときどうすべきかを釈尊に問うた。「迦絺那衣を受けるを許す」と定められた。『僧祇律』「雜誦跋渠法」 (大正 22 p.452 上)
- [3-2] B 文献資料には次のようなものがある。
- 〈1〉バツダヴァティー (Bhaddavati) の町にバツダヴァティヤ (Bhaddavatiya) という名の長者が住んでいて、ゴーシタ (Ghosita) 長者と友人であった。彼らはこの町とコーサンビーとを往来する商人からお互いの財産と年齢とを聞いて、贈り物をやりとりもったりしていたので、まだ会ったことはなかったが友情を感じていたのである。ある時バツダヴァティヤの家に疫病が発生し、彼は妻と娘とともにゴーシタを頼ってコーサンビーに向かったが、町の入口の休憩所で彼と妻は死んだ。ゴーシタ長者の布施を代わりに行っていた長者の友人のクティンビカ (Kuṭimbika) が娘を憐れんで養女とした。ゴーシタ長者は自分の作った布施堂が先を争う人々で騒がしいのをむしろ楽しんでいたが、彼女はフェンス (vati) を作り、入り口と出口を分けるよう提案して喧噪をなくしたので、元の名 Sāmā に vati を付して Sāmāvati と呼ばれた。ゴーシタ長者は永い間この喧噪の声を聞き慣れていたが、これが聞かれなくなったのでクティンビカに訊ねたところこの娘の話聞き、娘から父親のことを聞いて友人の娘であると知り、改めて彼女を自分の養女にした。

ある日町の祭りが行われ、サーマーヴァティーも王園に水浴に出かけたが、ウデー

ナ王が彼女を見そめ、ゴーシタに彼女を差し出すよう申し入れた。ところが彼は拒絶したので、王は屋敷を封鎖してしまい、彼と妻が自宅に入れないようにした。彼女は帰ってきてゴーシタ長者たちが外にいるので理由を聞き、王の申し入れを受けるよう勧めたので、ゴーシタは王にその旨をつたえ、王はサーマーヴァティを宮廷に入れて第一王妃とした (*aggamahesitthāne ṭhapesi*)。 *Dhammapada-A.* (vol. I pp.187~191, Burlingame 訳 vol. I pp.266~269)

- (2) 多聞第一として知られるクジュッタラーと慈住第一として知られるサーマーヴァティは、パドゥムッタラ仏の時にハンサヴァティヤという家系に生まれた。後に師の説法を聞いて、それぞれ多聞第一、慈住第一の地位を得たいと望んだ。そして命あるかぎり善行を積んで、天界に生まれ、天人の間を百千劫のあいだ過ごした。…… (この間にゴーサカ長者の話がはさまる) ……

そしてゴーサカ長者が長者の位を得て、毎日千金の喜捨を行っているころ、ウッタラーは天界に死んで、ゴーサカ長者の家の乳母の胎に生まれた。彼女は生まれたときに背が曲がっていた (*khujja*) のでクジュッタラー (*Khujjuttarā*) という名前がついた。

サーマーヴァティも天界に死んで、バッドヴァティヤ国のバッドィヤ市のバッドヴァティヤ長者の家に生まれ、サーマーヴァティという名前がつけられた。後にその町に飢饉が起こったので、長者は妻と娘の3人で友人であるコーサンビーのゴーサカ長者を頼って行くことにした。道中たいへん苦勞してコーサンビーにたどり着き、会堂に宿りした。ゴーサカ長者は自分の家の門口で貧者や浮浪者や乞食たちに布施していた。バッドヴァティヤ長者はこのようなみすぼらしい様子を友人には見せられないと、娘をゴーサカ長者のところにやって食事を持ってこさせた。しかし父と母は急に食べ過ぎたので食べたものを消化できずに死んだ。そのいきさつを聞いたゴーサカ長者は彼女が友人の長者の娘であることを知って自分の娘とし、500人の侍女をつけた。

ある日、ウデーナ王は町を歩いているときに、たくさんの侍女たちにかしづかれたサーマーヴァティをみそめ、長者にくれるよう申し込んだが長者は断った。そこで王は長者とその妻を家から追いだして家を封印させた。それを知ったサーマーヴァティは王の申し入れを受けるように言った。王は喜んで1,000人の女の中から500人の賢い女を選んで侍女とし、サーマーヴァティを後宮に住ませた。 *AN.-A.* (vol. I pp.418~419, pp.429~433)

- (3) ウデーナ王にはそれぞれ500人の女のお付を持つ3人の第一王妃 (*aggamahesī*) があつた。その中のサーマーヴァティはバッドィヤ市 (*Bhaddiyanagara*) のバッドィヤ長者 (*Bhaddiyasetṭhin*) の娘で、父の死後、父の友人であつたコーサンビーのゴーシタ長者の家で育てられた。成人に達した彼女をウデーナ王が見て愛情を生じ、宮殿に連れてきて灌頂させた。 *Paṭisambhidāmagga-A.* (pp.672~674)

- (4) 布施供養の無くなった勝音城から、比丘と比丘尼たちは四散した。大迦多演那は7日目に「この国に塵土が降る」と予言して、利益大臣の子である紺顔 (*Śyāmāka dāraka*) を侍者とし、世羅比丘尼は除患大臣の娘であるサーマーヴァティ (紺容

Śyāmāvati dārikā) を給侍として城を出た。利益と除患の2大臣は6日の間珍宝が降ったのでこれをもって国を出て、それぞれ利益と除患という城を造った。第7日目に、世羅比丘尼は橋閃毘(コーサンビー)城に行き、侍女のサーマーヴァティーを瞿師羅(ゴーシタ)長者に預けて養育させた。大迦多演那は天女たちと侍者童子を連れて大聚落に留まり、そこで寺院と神廟と銅蓋制底を建てさせたのち、再び旅を続けた。その途中の国々を濫波(Lambakapāla)と呼び、小国の王が死んだので、紺顔を立てて王とした。彼はさらに進んで歩迦拏国(Vokhāṇa)に行った。尊者の母親は亡くなってこの国に生まれ、賢善童女といったが、この童女に説法して錫杖制底を造った。そして中国に行こうとして雪山を通り、そこで布羅制底を造り、縛沙河を渡って布灑城に至って髮爪制底を造り、舎衛城に到着した。『根本有部律』「波逸底迦082」(大正23 p.880中~881中)

- (5) その時世尊は王舎城の竹林園に住されていた。影勝王(ビンビサーラ王)は南方からやって来た豪傑を將軍にした。そのとき摩竭提国と拘薩羅国との中間の曠野で500人の盜賊が暴れ回っていたが、將軍はこれを破って曠野城(Āḷavi)を建てた。ある因縁から妻を娶るときにこの將軍に初夜を捧げる習慣ができた。人々はこれを不満としてだまし討ちにしたため、將軍は怨んで夜叉に生まれ変わって大災害をなした。そこで子どもを人身御供に捧げる習慣ができた。釈尊はこれを知られて曠野城に遊行され教化されたので、夜叉は信者となった。そして夜叉はこの順番に当たっていた長者の子どもを釈尊に返し、釈尊は父母に返した。そこでこの子は曠野手(Hastaka Āḷavaka)と名付けられ、成長したこの子を人々は曠野城の王とした。一方世羅比丘尼から妙音(ゴーシタ)長者に預けられていたサーマーヴァティー(紺容)はきれいになっていたのので、摩竭提国の影勝大王、拘薩羅国の勝光大王(波斯匿王)、橋閃毘国の明勝大王⁽¹⁾、広巖城の栗姑毘(リッチャヴィ族)やその他の貴族からも求められていた。困った妙音長者はサーマーヴァティーに選ばせたので、彼女は「夜叉の手中より受けた童子」を選んだ。他の人々はこれを聞いて怖がって四散した。しかしそのとき曠野手は釈尊の説法を聞いたので結婚しなかった。紺容もそこに住して、仏子のために給仕人となることを望んだ。曠野手は城外に寺院を建て、四事供養して欠少するところなかった。後に曠野手は病にあって死んで無熱天に生まれた。曠野手が亡くなった後、サーマーヴァティーは橋閃毘の妙音長者のところに帰った。橋閃毘王のウデーナ(優陀延)王はサーマーヴァティーが処女のまま帰ったと聞いて、妻として迎えて妙花楼に置いた。『根本有部律』「波逸底迦082」(大正23 p.883下~886上)

(1) 明勝大王は不詳。ウデーナ王をさすかもしれない。

- [3-3] まずA文献資料であるが、パ・漢に共通する情報はサーマーヴァティーが優婆夷の中の慈住(mettāvihāri)第一とされることである。ただし(4)は供養聖衆第一とする。熱心な女性の仏教信者で、慈悲の精神に富む、聡明な婦人であったということになる。また(5)パーリのUdānaによれば、ウデーナ王が園遊している間に後宮に火事があって、侍女たちとともに焼け死んだということになっている。次に紹介するようにB資料では、この火事はもう一人の王妃であったマーガンディヤーの企みによって起こされたものとされるが、

〈6〉の『十誦律』資料では、王の王妃にサーマーヴァティー（舎彌婆提）とマーガンディヤー（阿奴跋摩 Anopamā）があって、前者は善好功德であり、後者は愚邪不善であったとされているから、すでにA文献においてこのような状況設定がなされていたと解釈してよいであろう。

またA文献資料には、サーマーヴァティーと侍女のクジュッタラーとの関係を示すものはないが、〈1〉から〈4〉の註に示したように、両者は常に並記されていて、相互に関連することが意識されているようであり、後に〔5〕のB文献資料において紹介するような王妃と侍女の関係であったこともすでにA文献において認識されていたと解釈してよいであろう。しかもこのB文献において語られる物語は、A文献においてクジュッタラーが多聞第一とされ、サーマーヴァティーが慈住第一とされるのと適合し、A文献の情報を意識して作られた物語であるといえることができる。

〔3-4〕次にB文献資料を検討しよう。これらはサーマーヴァティーの出自を語ったもので、〈1〉〈2〉〈3〉のパーリのアッタカターによれば、サーマーヴァティーはゴーシタ長者の友人であったバディヤ市（Bhaddiyanagara）のバディヤ長者（Bhaddiyaseṭṭhi）の娘で、両親が亡くなった後にゴーシタの養女として育てられ、後にウデーナ王に見初められて王妃となったとされている。〈4〉〈5〉の『根本説一切有部律』は、勝音城（Sovira 国の首都とされる Roruka か）の除患大臣の娘とされ、その話の内容はパーリ・アッタカターとは相当異なるが、後にゴーシタの養女となってから、ウデーナ王の王妃となったとすることについては共通する。しかしこの途中で語られる、サーマーヴァティーはたいへんきれいであったので、たくさんの王たちに望まれたが承知せず、紆余曲折をへて最後はウデーナの王妃となったというところは、むしろ〔6〕に紹介するパーリ・アッタカターの王妃マーガンディヤーの話に類似する。

いずれにせよ、これらの情報の中にどれだけの歴史的事実が含まれているかを判断する材料をわれわれは持たない。しかしそれほど信頼すべきものが含まれていないであろうことはいうを俟たないであろう。

なお以上の資料からは、サーマーヴァティーがなぜ慈住者第一とされるのかという理由は明らかではないが、後の〔8〕に紹介するB文献資料の中で、ウデーナ王の怒りに却って王を憐れんで、その慈悲の力によって王が射た矢が王妃を避けたというエピソードが語られる。

〔4〕次にサーマーヴァティーの侍女であったとされるクジュッタラーの資料を紹介する。

〔4-1〕A文献資料には次のようなものがある。

〈1〉比丘らよ、クジュッタラーと難陀の母のヴェールカンダキヤー（Veḷukaṇḍakiyā）は、私の信仰ある優婆夷の娘の秤（tulā）であり標準（pamāṇa）である。SN.017-024 (vol. II p.236)

〈2〉比丘らよ、信仰ある優婆夷はクジュッタラーと難陀の母のヴェールカンダキヤーのようでありたいと願うべきである。AN. 002-012-004 (vol. I p.088)、AN. 004-176 (vol. II p.164)

〈3〉比丘らよ、クジュッタラー（拘讎多羅）と難陀の母は、篤信の優婆夷の娘の限で

あり量である。『増一阿含』09-02（大正02 p.562中）

- 〈4〉比丘らよ、私の弟子優婆夷の中で多聞中の第一はクツジュッタラーである。AN. 001-014-007 (vol. I p.026)
- 〈5〉私の弟子の中で智慧第一はクツジュッタラー（久寿多羅）優婆斯である。『増一阿含』07-01（大正02 p.560中）
- 〈6〉衆會中の多聞の第一はクツジュッタラー（酤没儒怛囉）烏波薩吉（優婆夷）である。拘橋睽彌（コーサンビー）國に住す。『阿羅漢具徳経』（大正02 p.834中）
- 〈7〉優婆夷の名が列挙される中にクツジュッタラーがある。AN. 008-009-090 (vol.IV p.348)

[4-2] B文献資料には次のようなものがある。

- (1)（燃灯仏がスメダ＝善慧を今から無量劫の未来に成仏すると記別して）クツジュッタラーと難陀の母とが第一の優婆夷となるであろう。Apadāna (p.429)
- (2) 多聞の中の第一はクツジュッタラーであり、慈住者の中の第一はサーマーヴァティーであり、多聞の優婆夷の中の第一はクツジュッタラーであり、慈住者の優婆夷の中の第一はサーマーヴァティーであると示される。

彼女らは2人ともパドゥムッタラ仏の時代のハンサヴァティ（Hamsavati）という家系の家に生まれ、後の世に世尊の説法を聞きたいと精舎に行った。このうちクツジュッタラーは世尊の一人の優婆夷にして多聞第一の地位に置かれ、サーマーヴァティーは慈住者第一の地位に置かれたいと願って、2人とも生あるかぎり善を修し、天界に生まれて天人に輪廻して、百千劫を過ごした。……（この間にゴーサカ長者の話がはさまる）……

そしてゴーサカ長者が長者の位を得て、毎日千金の喜捨を行っているころ、ウッタラーは天界に死んで、ゴーサカ長者の家の乳母の胎に生まれた。彼女は生まれたときに背が曲がっていた（khuja）のでクツジュッタラーという名前がついた。AN.-A. (vol. I pp.418～419, 429)

- (3) クツジュッタラーは優婆夷の中で多聞を修する第一とされ、有学無碍解を得、女性の聖弟子となるために、サーマーヴァティーを上首とする500人の女たちに最初に話をした。これが次第説法（anupubbikathā）である。……

クツジュッタラーはこの賢劫の私たちの世尊の世に、天界に死んでゴーシタ長者の家の乳母の胎に生まれた。生まれたとき背が曲がっていたのでクツジュッタラーといわれた。後にゴーシタ長者によってウデーナ王のサーマーヴァティーに与えられ、彼女の召使いとしてウデーナ王の後宮に住んだ。Itivuttaka-A. (pp.029～032)

[4-3] パ・漢に共通するA文献資料では、クツジュッタラーは篤信の優婆夷の見本のような婦人で多聞第一とされるが、それ以外の情報はない。しかしA文献資料においても、サーマーヴァティーとの関係が認識されていたであろうことは、すでに述べた。

[4-4] B文献資料では、クツジュッタラーはゴーシタ長者の家の乳母の胎に生まれ、生まれたとき背が曲がっていたのでクツジュッタラーといわれるようになったとされる。後にゴーシタ長者によってウデーナ王の王妃サーマーヴァティーに与えられて、彼女の召使いとなったとされる。釈尊の話を聞いて仏教に皈依し、その話をサーマーヴァティーに語って聞

かせ、これによってサーマーヴァティーが仏教に帰依するようになったというのは、次項において詳しく紹介するエピソードである。

したがってクジュッタラーはサーマーヴァティーの侍女であったが、仏教の優婆夷という点では先輩であるから、A文献においてサーマーヴァティーと並記される場合にはクジュッタラーの方が先に記されるのであろう。また「多聞第一」とされるのは、釈尊の話をサーマーヴァティーに復唱するために真剣に聞いたというような背景がこれらの物語から想像される。

[5] 次に前項において少しく紹介した、サーマーヴァティーとクジュッタラーが関連して登場する資料を紹介する。

[5-1] A文献資料には2人の関係を明示するものはないが、優婆夷の第一として2人が並記されるのは、それが認識されているがゆえであろうということはすでに述べた。

[5-2] B文献資料を紹介する。

(1) その頃ウデーナ王はサーマーヴァティー王妃に花を買うため毎日8カハーパナ⁽¹⁾を与え、クジュッタラーという王妃の侍女が、毎日華鬘師スマナ(mālākāra Sumana)⁽²⁾の所へ行って花を買っていた。その日は華鬘師スマナがコーサンビーの3人の長者から許可を得て、1日だけ世尊に供養する日に当たっていた。そこで華鬘師が「世尊を招待しているので、あなたも一緒に説法を聞いていきなさい。その後残った花をもって帰ればよいでしょう」と勧めた。そして彼女は仏の説法を聞いて預流果に達した(sotāpattiphale patitṭhahi)。それまで彼女は8カハーパナのうちの4カハーパナで花を買ひ、残りの4カハーパナを自分のふところに入れていたが、その日は8カハーパナ全部で花を買って帰った。サーマーヴァティーはいつもの倍の花を見てその訳を糺し、クジュッタラーはそのわけを話した。王妃は叱るかわりに、「お前は甘露を飲んだ(pītaṃ amatam)のだから私にも与えよ」と言ったので、クジュッタラーは500人の女を前に仏から聞いた法を説いた。女たちはみな預流果に達した。サーマーヴァティーは、「これからは汚い仕事はしないでよいから、世尊の所へ行って法を聞き、帰ってから我々にそれを復唱せよ」と命じた。彼女は誠実に実行したので三蔵を保持する者(tipitakadharā)となり、世尊は「声聞優婆夷のなかで多聞にして説法する者の第一はクジュッタラー(etadaggaṃ mama sāvikanāṃ upāsikanāṃ bahussutānaṃ dhammakathikanāṃ yadidaṃ Khujjutarā)である」とされた。

Dhammapada-A. (vol. I pp.208~210, Burlingame 訳 vol. I pp.281~282)

(1) kahāpaṇa は貨幣の単位。4pāda, 20māsaka に相当する。クジュッタラーがくすねた4カハーパナは、どの位の価値に相当するのだろうか。盜戒の制戒因縁によれば、当時のピンピサーラ王のマガダ国の法制では、「1パーダ=5マーサカ以上の物を盗んだ場合には、王は捕らえて殺し、或いは縛し、或いは追放する。」(Vinaya vol.III p.45)とされている。クジュッタラーのくすねた4カハーパナ=16パーダはこのマガダ国での盜罪の16倍に相当する重罪ということになる。

(2) ゴーシタ資料【2】 [2-2] (6)を参照。

(2) そのときコーサンビーにゴーシタ長者とクックタ長者とパーヴァーリカ長者の3人の長者がいた。この3人は如来が世に出たということを知り、祇園精舎に世尊を訪ねて法を聞き、預流果を得て半月間仏を上首とする比丘サンガに大施を行って、その

後世尊をコーサンビーに招待した。彼らはコーサンビーにゴーシタ園とクックタ園とパーヴァーリカ園を造って、やって来られた世尊を毎日毎日供養した。ある日彼らの給仕者 (upaṭṭhāka) であったスマナ (Sumana) という華鬘師 (mālākāra) が長者達の許しを得て、仏たちを招待した。そのときサーマーヴァティーに仕えるクジュッタラーという奴隷女が8カハーパナを持ってスマナの家に行って世尊の説法を聞き、預流果を得た。それまで彼女は4カハーパナを自分のものにし、残りの4カハーパナで花を買っていたが、……(上記と同様の話が記される)……クジュッタラーは優婆夷の中で多聞第一という地位を得た。 *Paṭisambhidāmagga-A.* (pp.673~674)

- (3) そのときコーサンビーにはゴーシタ長者、クックタ長者、パーヴァーリカ長者がいて3つの精舎を造り、コーサンビーに遊行してこられた仏を上首とする比丘サンガに寄進した。ある日世尊は華鬘作りの長老 (Malākāra-jeṭṭhaka) の家に行かれた。そのときクジュッタラーはサーマーヴァティーの花を買いに8カハーパナを持ってその家に行った。華鬘師は「今日は花を全て世尊に献上したい、あなたも一緒に説法を聞きなさい」と言った。……(以下 *Dhp.-A.*と同様な話が記される)……サーマーヴァティーはクジュッタラーを礼拝して、「今日からはあなたは汚い仕事をする必要はありません。私たちのために師をつとめて下さい」と尊重した。……

そしてサーマーヴァティーを上首とする500人の女たちは、あなたが毎日世尊のところに行って法を聞いて、それを私たちに説いて下さい、と言った。彼女はそのようにして三歳を知るようになり、世尊は「女性の声聞優婆夷のなかで多聞の第一はクジュッタラー (etadaggaṃ mama sāvikānaṃ bahussutānaṃ upāsikānaṃ yadidaṃ Khujjutarā) である」といわれることになった。 *Itivuttaka-A.* (pp.029~032)

- (4) サーマーヴァティーは侍女のクジュッタラー(曲背)女に毎日千金を与え香を買わせていたが、曲背女は500金をだまし取っていた。しかし仏法を聴くに及んでこれをやめた。サーマーヴァティー夫人はいつもより香が多い理由を聞いて、「自分は外出できないのでお前は毎日世尊所へ詣り、妙法を聴いて自分の為に説きなさい」と命じ、彼女を世尊の元にやって聞法させ、間接的に法を聞いて不還果を得た。『根本有部律』「波逸底迦082」(大正23 p.886上)

- (5) コーサンビーのウデーナ(優填)王の右夫人のサーマーヴァティー(該容)にはクジュッタラー(度勝)という長老の青衣があった。クジュッタラーは町に出て香を買う役目を仰せつかっていたが、香のお金を少しずつ貯めては、仏や比丘たちに食事を供養していた。このような功德により香気が旧に倍するようになり、そのわけを尋ねられて事情を話すと、サーマーヴァティーは仏という言葉に喜び、クジュッタラーが聞いてきた仏の説法を又聞きするようになった。『中本起経』(大正04 p.157中~下)

[5-3] ここに紹介したB文献資料は、パ・漢すべてに共通する情報を伝える。簡単に言えば、クジュッタラーはサーマーヴァティーの侍女であって、サーマーヴァティーの使いで毎日町へ花(あるいは香)を買いに行っていたが、その時偶然に釈尊の説法を聞くことになってたちまち帰依し、サーマーヴァティーはこのクジュッタラーから釈尊の話を間接的に聞くことによって、仏教に帰依することになったということである。

そしてパーリ資料は、クツジュッターラーが釈尊の話を聞いたのは華鬘師スマナの勧めによるとする。このスマナは前節で紹介したゴーシタなどの3人の長者が、釈尊を初めてコーサンビーに招待して交互に供養したその時に、1日だけ自分にも供養させてくれと願って許された、あの3人の長者に仕えていた者である。したがってこの物語を信じるとすれば、クツジュッターラーとサーマーヴァティーが釈尊に帰依するようになったのは、釈尊が初めてコーサンビーを訪れられたその時のことということになる。

[6] 次にパーリのアッタカターにおいて、ウデーナ王の第2の王妃とされるヴァースラダッターを主な登場人物とする資料を紹介する。

[6-1] A文献資料としては次のもののみであって具体的な名は記されないが、B文献資料から、それがヴァースラダッターであると知られる。

- (1) 世尊は拘睺弥におられた。ウデーナ（優陀延）王は賓頭盧の親しい知識であったので毎朝訊問した。そのとき不信樂の婆羅門大臣があつて、賓頭盧が立って迎えないことをなじり、もし立って迎えないなら命を奪えと入れ智慧した。賓頭盧はその心を知って、もし立って迎えないければ自分を殺し、王は地獄に落ちるだろう、しかし立って迎えば位を失うだろうと予知し、立って迎え、このわけを話した。ウデーナ（優陀延）王の「何時王位を失うのか」との問いに「今後7日」と答えたので王は急いで戻り城を固めたが、何事もないので、ガンジス河に遊んだ。そのとき、慰禪王の国に7年間も雨が降らず、マガダ国の瓶沙王には出水珠があると聞いて、王舎城を兵糧攻めしようとして取り囲んだ。しかし大臣が機転を利かして蓮を植え、波羅殊提王にも食料は十分であるから、共に戦ってはならないと使いを送った。しかし慰禪王に国を奪う気持ちはなく、ただ出水珠を求めての戦いであつたことが判つたので、珠を送る事にし、波羅殊提王は兵をコーサンビーに戻そうとした。その途中で、ウデーナ（優陀延）の遊ぶのに会い、象使いと琴をよくするので捕らえて国に還り、自分の子である瞿波羅（王子、拘波羅とも書かれている）に調象術を、自分の娘（固有名詞は上げられないけれどもヴァースラダッターをさすと考えられる）に琴を教えさせて、7年間捕虜とした。そのとき跋難陀釈子はコーサンビーのサーマーヴァティー夫人（奢弥跋提）のところから慰禪国のウデーナ（優陀延）の所に行き、帰りに手紙を託されて運んだので、「比丘は白衣のために使いをするべからず」という規則が定められた。

その間にウデーナ（優陀延）は琴を教えていた王女と通じたけれども、これを知つた瞿波羅王子は自分の師匠であるからと黙っていた。のちウデーナ（優陀延）は王女を連れて逃亡し、国に帰って、八婆羅門を供養することとなり、摩訶迦旃延は大婆羅門種であるからとその筆頭となつた。世尊はその招待の席で、種々に（十善業道、戒、四禪、四無色定などを）説法された。『四分律』「雑犍度」（大正22 p.961中）

[6-2] B文献資料も少ない。

- (1) ウデーナのもう一人の王妃はウツジェーニー（Ujjeni）の王チャンドパッジョータ（Caṇḍapajjota）の娘ヴァースラダッター（Vāsuladattā）である。ある時チャンドパッジョータは豪華な庭園から戻りながら、「このような強大な国を持つ者が他にいるだろうか」と訊ねたところ、家臣が「コーサンビーのウデーナ王がいる」と答えたので、

「彼を捕虜にせよ」と命じた。そこで策を巡らせ木製の象を作って60人の男をその中に入れ、国境近くの池の堤においた。森の番人がこれを見て、「真っ白な王にふさわしい象を見つけた」とウデーナ王に報告した。彼は出かけて呪文を唱えたが、それが効かないのでさらに追いかけているうちに、軍隊と離れて独りになり、チャンダパッジョータ軍に捕えられた。

チャンダパッジョータはウデーナから呪文を聞き出そうとするが、ウデーナは「臣下の礼をとるなら与える」といったので、チャンダパッジョータは娘のヴァースラダッターにカーテンの陰に隠れて、ウデーナから呪文を聞き出すよう命じた。2人が仲良くなならないように、娘は背の曲がった女 (khujjā) で男はハンセン病患者 (saṅkha-kuṭṭhin) ということにした。ある日ウデーナは呪文を繰り返し教えても彼女が正確に反復できないので、「この間抜けの背曲女め」と大声を出した。彼女も怒って「ハンセン病の悪党め」と返答した。2人はお互いにその言葉の意味が分からず、カーテンを開けてみてチャンダパッジョータの企みに気がつき、そして恋に落ちた。ウデーナは「自分の命を救ってくれたら君を王妃にしよう」と申し入れ、彼女も応じることにして、父王に呪文習得のためとって外出の自由を求めた。そしてチャンダパッジョータが園遊の間にウデーナはヴァースラダッターとともに牝象に乗って逃げ出した。軍隊に追いつかれる毎に金貨や銀貨を撒いて逃れ、コーサンビーに還ったウデーナはヴァースラダッターを第一王妃にした (aggamaheṣiṭṭhāne ṭhapesi) (1)。 *Dhammapada-A.* (vol. I p.191~199, Burlingame 訳 vol. I pp.270~274)

(1) T.W.リス・デヴィッツ著 中村了昭訳『仏教時代のインド』（大東出版社 昭和59年8月）pp.003~005に詳しく紹介され、「コーサンビとアヴァンティ国の王家もまた結婚によって結ばれていた」と、両国の関係が歴史的事実のように書かれている。なおジャイナ教の資料にも、ウツジェーニーのチャンダパッジョータ王とコーサンビーの関係に言及するものがある。それはマハーヴィーラの生涯を描いた子供向けの絵本であるということであるが、それによると次のような物語である。ウツジャインの王プラディヨータは凶暴であったので「凶暴なプラディヨータ (Caṇḍa-pradyota)」と呼ばれていた。彼はカウシャーンビーを攻撃したが、その王のウダヤナはまだ少年であったので、代りにマリガーヴァティー (Mṛgāvati) が統治していた。プラディヨータ王はマリガーヴァティーが自分の主権を認めるなら、国に帰るという手紙を送ったのに返事がなかったため、王は怒ってカウシャーンビーを攻撃した。その時尊師マハーヴィーラはカウシャーンビーにやってきて説法したが、その聴衆の中にマリガーヴァティー妃もプラディヨータ王もいた。王妃は尊師の教えを聞いて「プラディヨータ王が許すなら予修式 (dikṣā) を受けたい」といい、王が「私はあなたの子であるウダヤナを自分の子と見なして、助けよう」とそれを許したので、その争いは鎮まった。「中村元選集 [決定版] 第10巻 『思想の自由とジャイナ教』 pp.701~702

(2) アヴァンティの王チャンダパッジョータ (Caṇḍapajjota) は、ウデーナ王の象使いの術を得ようと、兵を潜ませた木の象を作って王を捕え、技術を盗ませるために自分の娘（固有名詞は上げられないけれどもヴァースラダッターをさすと考えられる）を送りだした。ウデーナ王はこの娘と結婚して自分の都に帰った。彼女の胎に生まれたのがボーディ王子である。MN.-A. (vol.III p.325)

(3) ウデーナ王にはそれぞれ500人の女のおつきを持つ3人の第一王妃 (aggamaheṣi) があった。チャンダパッジョータ王の娘がそのうちの一人のヴァースラダッターであ

る。 *Paṭisambhidāmagga-A.* (pp.672~674)

[6-3] A文献資料は漢訳の『四分律』であり、B文献資料はパーリのアッタカターであるが、物語のあらすじは完全に一致する。釈尊の生涯や釈尊教団形成史と関係するような記述は含まれていないが、B文献の〈2〉によれば後に検討するボーディ王子は、ウデーナ王とヴァースラダッター王妃の間に生れた子ということになる。

[7] 次にウデーナ王の王妃とされるマーガンディヤーを主な登場人物とする資料を紹介する。

[7-1] A文献資料には次のものがある。〈1〉と〈2〉に登場するマーガンディヤはここでの主題であるマーガンディヤー王妃の父親であって、マーガンディヤー本人ではないが、B文献資料から知られるように、マーガンディヤーと密接に関連するものであるから、マーガンディヤー資料として扱っておく。

〈1〉 (仏の偈) (むかし菩提樹下で悟りを開こうとしたとき) 渴愛と不楽と貪欲 (という3人の魔女) を見ても、淫欲の交わりをしたいという欲望は起こらなかった。この糞尿に充ちた身体がどれほどのものであろう。その足に触れることすら欲しない。

(マーガンディヤの偈) もしもあなたが多くの人王たちによって (*narindehi bahūhi*) 求められたこのような宝のごとき女を欲しないならば、どんな見解や禁戒や生活方法やどんな生に生まれ変わることを説くのですか。

世尊は説かれた。「マーガンディヤよ、これを説くというようなものはない。すべてのものがらにおける執着と偏見に固執することなく、内心の安らぎを見たのです」と。

マーガンディヤが言った。「聖者は偏見に固執することなく内心の安らぎを見たと言われますが、賢者たちはこれをどう説いているのでしょうか」と。

世尊は説かれた。「マーガンディヤよ、見によっても、聞によっても、智によっても、禁戒によっても清らかにはならないと、私は説きます。また無見によっても、無聞によっても、無智によっても、無禁戒によっても清らかにはならないとも説きます。ただこれらを抛棄し、執着せず、とらわれず、生を望まないこと、これが平安です」と。

マーガンディヤが言った。「もし、見解によっても、聞によっても、智によっても、禁戒によっても清らかにはならず、また無見解によっても、無聞によっても、無智によっても、無禁戒によっても清らかにはならないと説かれるとすれば、それは愚鈍きわまりない教え (*momuha dhamma*) であると思います。ある人は、見解によって清らかさはあると考えます」と。

世尊は「一つの見解に執着してはならない、これは真理 (*sacca*) であるとか虚妄 (*musā*) であるとかと論争してはならない、諸々の偏見を離れなければならない、それが解脱である」と、説かれた。 *Suttanipāta Māgandiyasutta* vs.835~847

〈2〉 仏はこの義足経を説いて言われた。「我は邪なる三女を見ても邪淫を欲しなかったのに、今さらどうして尿尿を抱くことがあるのか。足をもって触れることさえしない。我が説く所は、淫を欲せず、法行として内観せざるものなし。悪を聞くと雖も厭を受

けず、内に止まらず苦を計らず。外なる好き筋や皮の裏を見るに、尊きものはいかにしてこれを受くべきや。内外に行じてこれを覚観し、賢きものの辺において癡行を説く。……。欲海を捨てて度りて念うことなかれ。村において忍んで行くかしこきものは、欲すでに空しく、念想を止め、世の邪毒は伏して生ぜず。……。捨てて想わざれば縛あることなし。かしこきに從つて解して懈らず。見と想を制して余にとらざれば、便ち声を厭うて三界を歩む」と。『義足経』『摩因提女経』（大正04 p.180中～下）

〈3〉世尊は俱舍弥国におられた。そのときウデーナ（優填）王には千人の夫人がおり、一部の500人はサーマーヴァティー（舍彌婆提）を首として善好功德があり、一部の500人はマーガンディヤー（阿奴跋摩 Anopamā）を首として悪邪不善であった。

『十誦律』『波夜提082』（大正23 p.125下）

[7-2] B文献資料には次のようなものがある。

〈1〉ウデーナのさらにもう一人の王妃はマーガンディヤー（Māgandiyā）である。彼女はクル国（Kururatt̥ha）のマーガンディヤ婆羅門の娘で、母親の名前もマーガンディヤーであり、叔父もまたマーガンディヤといった。彼女は天女のように美しく多くの大家の子弟から求められていたが、父親は彼女にふさわしくないと拒絶していた。ある日世尊は世間を観察し、マーガンディヤ婆羅門とその妻が不還果（anāgāmiṃphala）に到達する能力ありと認めたので、衣鉢を持って婆羅門が聖火の供養をしている市場の一角へ出かけた。婆羅門は世尊の人柄を見て、「この世にこの人に匹敵する人はいない、娘をこの人に与えよう」と考えて世尊に申し入れた。彼は急いで家に帰り、妻と着飾らせた娘を連れて世尊の所へ戻った。世尊は彼の申し入れに答える代わりに、「成道の際、マラーとその娘たちがいろいろ誘惑してきたとき、自分は『この糞尿に満ちた肉体に触れることを望まない、……』と答えた」と偈を唱えられた。これを聞いて婆羅門と婆羅門の妻は不還果に達したが、マーガンディヤーは「糞尿に満ちた身体」と言われたことに怨みをいだいて、「自分に相応しい申し分のない夫を見つけ、ゴータマがなすべきであったことを思い知らせてやりたい」と心に誓った。彼女の両親は彼女をウデーナ王の王師をしている叔父のチューラマーガンディヤ（Cūlamāgandiyā）に託し、出家して阿羅漢果を得た。チューラマーガンディヤは「彼女は王妃に相応しい」と考え、彼女をウデーナ王に差し出した。王は気に入って第一王妃にした（aggamaheṣiṭṭhāne ṭhapesi）。Dhammapada-A. (vol. I p.199～203, Burlingame 訳 vol. I pp.274～277)

〈2〉そのとき釈尊は舍衛城に住されていたが、仏眼によってクル国のカンマーサダンマの町（Kammāsadammanigama）に住むマーガンディヤという婆羅門に阿羅漢の機根があるのを見て、カンマーサダンマに行かれた。婆羅門は金色に光る世尊を見て、自分の娘（名前は記されていないがマーガンディヤー）を大勢のクシャトリヤの王が求めても与えないが、与えるならこの人だと考えた。娘も金色であったからである。そこで急いで家に帰って娘を着飾らせて、仏に会いに行った。そして婆羅門が娘をあなたに与えたいというと、世尊はSuttanipātaの第835偈を説かれた。こうして二人は以下の偈を説きあった。Suttanipāta-A. (vol. II pp.542～548, 村上真完・及川真介訳『仏のことば註』第3巻 春秋社 1988 pp.682～696)

(3) その時マーガンディヤは一晩中村外で火を供養して、早朝に村に入った。世尊もまた村に乞食に入り、マーガンディヤ婆羅門と出会った。彼は十力を見て、自分の娘の美貌にふさわしい者を探してきたが、このような出家者こそふさわしいと考え、急いで家に帰った。この婆羅門には出家の家系 (pabbajitavamsa) があり、だからこの出家者に会ったのだと考えて、大急ぎで妻に命じて娘を着飾らせた。

婆羅門と婆羅門の妻は娘と一緒に世尊に会い、「きみ、出家者よ、私は娘の美貌にふさわしい青年を探してきましたが、あなたこそふさわしい。私の娘をあなたに仕える者としてさし上げます。受け取って下さい」と申し入れた。世尊は申し入れに答えるかわりに、「成道の際、マーラーとその娘がいろいろ誘惑してきたとき、自分は『この糞尿に満ちた肉体に触れるつもりはない、……』と答えた」と偈を唱えられた。マーガンディヤは「糞尿に満ちた身体」と言われたことに怨みを抱いたが、婆羅門と妻はこの世尊の教えによって不還果に達し、出家して阿羅漢果を得た。時にウデーナ王は、チューラマーガンディヤ (Cūlamāgandhiya) の仲介によってマーガンディヤの娘を後宮に入れた。AN.-A. (vol. I pp.435~438)

(4) ウデーナ王にはそれぞれ500人の女のおつきを持つ3人の第一王妃 (aggamaheṣi) があつた。マーガンディヤ婆羅門の娘マーガンディヤは世尊の給仕をして父親から与えられようとして、世尊の偈を聞いて世尊に恨みを抱いた。その両親は MN.075 *Māgandhiya-s.* (マーガンディヤ経) (1) に説かれているように不還果に達し、出家して阿羅漢となった。彼女の叔父のマーガンディヤ (cūlapitar Māgandhiya) がコーサンビーに連れて行って王に与えた。彼女も王の王妃の一人である。Paṭisambhidāmagga-A. (pp.672~674)

(1) このマーガンディヤは遍歴者 (paribbājaka) とされていて、今の主題に係わる情報は含まれていない。

(5) 世尊はクル地方を遊行され、カルマーシャダムヤ (Kalmāṣadamya) に着かれた。その時この地にはマーガンディヤ (マーカンディカ Mākandika) と呼ばれる遊行者が住んでいて娘が生まれた。彼女は大変美しいのでアヌパマー (無比 マーガンディヤをさす) と命名され大切に育てられた。ある時マーカンディカは町で乞食の後、木の根元で跏趺坐されている世尊を見て、この沙門こそ娘の婿に相応しいと思った。マーカンディカは近づいて娘を献上したいと申し出た。世尊は「糞尿に満ちた彼女に足でさえ触れない」と偈を唱えた。

マーカンディカはマーガンディヤを連れてカウシャーンビーに往つてある園林に留まっている時、ウデーナ王 (ウダヤナ・ヴァツツ王 Udayana Vatsa) が見て後宮に入れ、マーカンディカは筆頭大臣に任命された。Divyāvadana (pp.515~ 平岡聡訳『ブッダが謎解く三世の物語』下 pp.398~)

(6) 摩沙国人の無憂という外道の婆羅門があり、妻を舍利といった。後に一女を生んだが類いまれなほどの美人であったので、無比 (アノーパマー=マーガンディヤをさす) と名付けられた。成長して無比は自分に相応しい容貌の者でなければ結婚しないと誓った。そのとき世尊が俱舍弥国にやってこられたのを見た無憂外道は、これこそ自分の娘に相応しいと家に戻って返して、娘を着飾らせて釈尊のところに来て、

娘を与えたいと言った。釈尊は「成道の時に3人の魔王の娘の誘惑にも欲望を生じなかつた。いわんや不浄が充滿する卑賤の身に足指すらも近づけたくない」と偈を唱えられた。無憂と娘はこの言葉を聞いて仏のところから去った。そしてコーサンビーに行つてウデーナ（鄔陀延）王に無比を与えた。王は無比を妙花樓に置き、500人の侍女をつけた。根本有部律「波逸底迦082」（大正23 p.886上～891下）

〈7〉 仏は句留国に住しておられた。県を悉作法と云つた。一人の梵志があり、マーガンディヤ（摩因提）と云つた。その娘（摩因提女）は端正でならぶものがなかつたので、国王や王子・大臣・長者などが競つて求めたが、娘にふさわしい者でなければと応じなかつた。あるとき樹間で坐禅している仏を見た梵志はこれこそ娘にふさわしいと家に帰り、娘を着飾らせて妻とともに仏に会いに行つた。その時仏はA資料の〈2〉に紹介した偈を説いた。『義足経』（大正04 p.180上～下）

〈8〉 コーサンビー（拘深）国に婆羅門があり、マーガンディヤ（摩回提）と云つた。娘があつてならぶものはない美しさであつたので「無比」（マーガンディヤをさす）と名づけられた。隣国の王や豪族たちは奪ひあつたが、婆羅門はこの美しさにふさわしい者に与えたいと考えていた。そこに仏がやつて来て、これこそがふさわしいと妻と娘を着飾らせて仏に会いに行つた。仏は表面は美しくとも中身は汚らしい、むかし成道の時に魔天の娘が誘惑してきたが、糞袋のようなものに何で恋い焦がれようかと言つて悪魔を退散させたことを説かれた。婆羅門は恥じ入つて、娘をコーサンビーのウデーナ（優填）王に与えた。王は喜んで娘を後宮に入れ、婆羅門を太傅（大臣）となした。『仏説優填王経』（大正12 p.070下～071上）

[7-3] A文献資料の〈1〉〈2〉は一読してわかるように、B文献のマーガンディヤが王妃となる前の事績を語る物語の素材となつたものと思われる。

〈3〉では、ウデーナ王にはサーマーヴァティーとマーガンディヤの2人の夫人があつて、サーマーヴァティーは善好功德であり、マーガンディヤは悪邪不善であつたとされている。次項の[8]で紹介するように、B文献ではサーマーヴァティーは善玉、マーガンディヤは悪玉という構図が定着しているけれども、その構図がすでにここに現れているわけで、この構図はA文献の時代から引き継がれたものであろう。なぜならサーマーヴァティーはA文献においても慈住者第一の優婆夷とされるように善玉の代表であり、そしてこの〈1〉〈2〉に現れるマーガンディヤは釈尊の教えに反対する者として登場しているからであつて、マーガンディヤはその娘とされるからである。しかしながらB文献では、父親と母親は、ここに唱われた偈によって不還果に達したとされている。

[7-4] B文献ではマーガンディヤは比類なき美貌の持ち主で、そこで「無比」とも呼ばれるのであるが、彼女は王や王子や大臣や長者から求められたけれども、両親はそれには応じず、釈尊こそ娘にふさわしい者と見込んだが、糞尿に充ちた身体には触れたくもないと断られ、そこで釈尊に恨みを抱くようになったとされている。このような物語の素材は明らかにA文献の〈1〉〈2〉にあるわけであつて、注釈書が必ずしも荒唐無稽な物語を創作したということはなさそうに思われる。

[8] 次にサーマーヴァティーとマーガンディヤの関係資料を紹介する。

[8-1] A 文献資料には次のようなものがある。

〈1〉 そのとき小国に反乱があって、王は城の後事を摩健提 (Māgandīya) 婆羅門に託して出征した。婆羅門はマーガンディヤー (阿奴跋摩) の父親で、ここまで取り立てられたのは娘のおかげだと考えて、サーマーヴァティー (舎彌提) の後宮を火事にさせて皆殺しにした。王はこの因縁を知って、婆羅門を国外追放に処し、マーガンディヤーを殺した。『十誦律』「波夜提 082」(大正 23 p.125 下～126 中)

〈2〉 時に拘睺弥に二部の大衆があった。第 1 の師は清論で、共行弟子は雹口、依止弟子は頭頭伽、優婆塞弟子は頭磨、檀越は優陀耶王、優婆夷弟子は舎彌夫人、後宮青衣弟子は頻頭摩邏であり、第 2 の師は善釈で、共行弟子は垢雹、依止弟子は吒伽、優婆塞弟子は無烟、檀越は渠師羅居士、優婆夷弟子は魔健提女で名は阿窰波磨、後宮青衣弟子は波駄摩邏人、そして各々に 500 人の比丘と比丘尼、優婆塞、優婆夷があった。『僧祇律』「単提 004」(大正 22 p.333 下～334 中)

[8-2] B 文献資料には次のようなものがある。

〈1〉 クツジュッターラを通して間接的に釈尊の説法を聞いていたサーマーヴァティーと 500 人の女は、直接世尊に会いたいと願うようになったが、後宮を出ることは難しいということで、自分たちが住んでいる部屋の壁に穴を開けて、世尊が 3 人の長者の家へ行かれる時、穴から眺めて香や花を供養した。

ある日マーガンディヤーはこれらの女たちが住む処を通りかかり、部屋に穴があるのを見て訊ねたところ、彼女が世尊に対して憎しみをもっていることを知らない女は、「世尊が町に来られた時、ここで世尊を見て礼拝するのです」と言った。そこでマーガンディヤーは仏とサーマーヴァティーらへの恨みを晴らそうとウデーナ王に、「王よ、サーマーヴァティーと侍女たちは不忠であなたの命を奪おうとしています」と告げた。王はその言葉を信用しなかったが、3 度目に「私を信じないなら、彼女たちの部屋へ行って自分で確かめてください」と言われ、王はそこへ行き壁の穴を見た。そしてその訳を説明されたが、彼は怒らず穴を塞がせ、窓を作らせた。

マーガンディヤーは女たちを痛めつけることができなかったので、外道を買収して世尊が町に現れた時罵声を浴びせ、仏を町から追い出すよう扇動させた。阿難はこの罵声を聞いて余所に移ろうと勧めたが、世尊は耐えなければならないと、『ダンマバダ』の第 320～322 偈を唱え、「これは 7 日間だけで静まる」と言われた。

次にマーガンディヤーは、ウデーナ王の酒の相手をしている時、王師である叔父に 8 羽の死んだ鶏と 8 羽の生きた鶏を持って宮廷に来るよう依頼した。そしてマーガンディヤーは王のために生きた鶏の調理をサーマーヴァティー以下の女たちに命じるように勧めた。王は従者に命じたが、サーマーヴァティーの女たちは「殺生は行わない」と拒絶した。そこでマーガンディヤーは、「この鶏を調理して沙門ゴータマに送れ」と命じるよう王を唆した。こんどは従者は生きた鶏を持って行くふりをして、死んだ 8 羽に取り換えて女たちに送って、これを調理し世尊に届けるようにと言った。女たちは「これは確かに私たちの仕事だ」と受け取った。従者の報告を聞いたマーガンディヤーは王に、「彼女らはあなたの望むようにはしないのです」と言った。しかしこのときも王は動じることなく黙っていた。そこでマーガンディヤーは次の手段を考えた。

当時王は自分の時間をサーマーヴァティーとヴァースラダッターとマーガンディヤーの3夫人に均等に割り、7日毎にそれぞれの部屋で過ごすことにしていた。マーガンディヤーは明日から王がサーマーヴァティーの部屋に行くことを知って、叔父に「解毒剤で歯を洗った蛇を一匹送ってほしい」と依頼した。王はどこに行く時でも、ヒマラヤ山でアッラカッパ仙から授けられた調象のための琵琶を携えるのが常であった。琵琶の鞘には穴があり、マーガンディヤーは蛇をその穴に挿入し穴を花束で塞いだ。王がサーマーヴァティーの部屋に移ろうとする朝、マーガンディヤーは「自分は悪い夢を見た、そこへ行くべきではない」と止めた。王は聞きいれず、3度繰り返した後、それでは私も一緒に参りますと同行した。王は食事の後枕元に琵琶を置いて横になった。マーガンディヤーは歩き回る振りをして花束を抜いた。蛇は穴から出て鎌首を持ち上げた。マーガンディヤーは大声を上げ、「王が自分の言うことを聴かないからです。サーマーヴァティーたちは王が亡くなられたほうがよいのでしょうか」と非難した。サーマーヴァティーは女たちに、「私たちには他に抛り所はありません (amhākaṃ aññaṃ paṭisaraṇaṃ natthi)。王にも、妃にも、自分へも同じ心を持つように (narinde ca deviyā ca attani ca samasamaṃ eva cittaṃ)。何人に対してとも怒りを起こしてはなりません (mā kassaci kopaṃ karittha)」と諭した。

王は死の恐怖に襲われ大いに怒って弓を執り、サーマーヴァティーの胸をめがけて矢を射たが、彼女の慈の威力によって (mettānubhāvena) 矢は往きと同じ経路で王の心臓に向かって還ってきた。王は「命のない矢でも彼女の善良さを知っているのに、人間である自分は知らなかった」とサーマーヴァティーの前に跪き、「自分の抛り所になってほしい」と偈を唱えた。サーマーヴァティーは「私でなく、ブッダに抛り所を求めなさい (saraṇaṃ gaccha taṃ buddhaṃ)」と偈を返した。

王は世尊に帰依し、世尊を招待して、7日間施食を行った。サーマーヴァティーにも恩恵を与えようとしたが、彼女は「金や銀は要らない、毎日世尊をお招きして、説法が聞けるようにしてほしい」と言った。王は世尊に申し入れたが、世尊は「仏は一箇所にいつも往くことはできない、多くの人が望んでいるから」と答え、代わりに阿難を指名された。そこで阿難と500人の比丘たちは毎日宮殿に行き説法したので、歓喜した彼女たちは500の黄衣を贈って敬意を表した。

マーガンディヤーはウデーナ王とともに園遊に出ているときに、叔父にサーマーヴァティーと女たちを後宮に閉じこめて、布に油をしみ込ませて柱に巻き付け、火を放つように頼んだ。火が回ったときサーマーヴァティーは、「輪廻転生している間には何度もこういう目に会った。これは業の報いです。心をなおざりにしないように」と教えた。ウデーナ王はサーマーヴァティーの死を知るとたいへん悲しみ、マーガンディヤーの企みであると気づいて、マーガンディヤー自身に告白させるように仕向けて、その身内のすべてを呼び寄せ、捕えて穴を掘ってその中に坐らせ、藁をかけて火をつけた。

比丘たちは信仰深いサーマーヴァティーたちがなぜこうもむごい死に方をしなければならなかったのかと不思議がった。仏は輪廻を重ねていく間には放逸に流れて悪いことをすることもがあると過去の話がされ、マーガンディヤーは生きていても死んでい

るが、サーマーヴァティーはじめ 500 人の女たちは死んでも生きていと説かれ、精進こそ不死の道であり、放逸は死の道であるという言葉で始まる『ダンマパダ』の第 21～23 偈を唱えられた。*Dhammapada-A.* (vol. I p.210～228、Burlingame 訳 vol. I pp.282～293)

(2) そのときサーマーヴァティーの 500 人のお付の女たちは、ウデーナ王に仏に対する信仰心がなかったので、仏のところに行って仏に会うことができなかった。そこで道を歩かれる十力を壁を破って穴を作って見た。マーガンディヤーはそれを見てウデーナ王に、サーマーヴァティーのお付の女たちはあなたに愛情を持たずに、ゴータマに帰依し、壁を破ってゴータマの姿を見えています、と告げた。そこで王は、上方に穴のある網の窓を作った。

マーガンディヤーは王の心を乱すことができなかったのを知って、彼女らに王に対する愛情がないことを知らしめようと、8羽の鶏をあなたのために料理するように命じて下さいと言った。王はそうしたが、サーマーヴァティーは優婆夷にして預流果を得た者は生きた鶏は料理できませんと触りもしなかった。マーガンディヤーは沙門ゴータマのために料理するように命じて下さいと言ひ、殺させた鶏を渡した。サーマーヴァティーは料理した。マーガンディヤーは「ほらご覧なさい」と言ったが、しかし王の心を乱すことはできなかった。

ウデーナ王は彼女らの住処に 7 日間ずつ行っていた。マーガンディヤーは 1 匹の黒い子蛇を琵琶の節のなかに入れて自分の住処に置いた。王はどこに行くにもそれを持っていくのが習わしであった。王がサーマーヴァティーのところに行くとき、マーガンディヤーは「彼女は沙門ゴータマに与している者で、あなたではありません。あなたに瞋恚をなすかも知れませんから、今しばらくここにいて下さい」と言った。王はサーマーヴァティーの住処に 7 日間を過ごし、再びマーガンディヤーの住処にやって来た。その時マーガンディヤーは王の持ってきた琵琶を手にとって動かし、「大王さま、この中で何か動いています」と言って、琵琶を放りだして逃げた。そのとき王は怒りに歯をガタガタ鳴らして、「急いでサーマーヴァティーと女たちを呼べ」と命じた。サーマーヴァティーは王の怒っているのを知って、残りの女に相を与え、「王はあなた方を殺そうとしている、今は特別の慈遍満によって王に遍満させましょう (odissakamettāpharaṇena rājānaṃ pharatha)」と言った。王は弓を持ってきて矢を放とうとした。その瞬間、サーマーヴァティーを上首とする女たちはその領域から慈を拡げた。王は汗を流し、身体を震わせるばかりで矢を放つことを果たせなかった。そしてサーマーヴァティーの指示によって矢を地面に向かって放った。その瞬間、王はまるで水に入ったように衣服も髪の毛も汗びっしょりとなってサーマーヴァティーの足下に身を投げ出し、「王妃よ私を許してくれ、破壊者の言葉に唆されてなしたのだ」と言った。そしてサーマーヴァティーの意向にしたがって十力に布施し、食後に精舎に行って説法を聞くことを許した。そして一人の比丘を招いて法を説いてもらうことになり、阿難がその任に当たった。*AN.-A.* vol. I (pp.440～443)

(3) サーマーヴァティーのお付の女たちは仏を見たいと熱望して、壁を破って十力が道を歩かれるのを見て礼拝した。マーガンディヤーはこの穴を見て、世尊への怨みから

ウデーナ王に、「サーマーヴァティー付の女たちは壁を破ってゴータマに帰依し、あなたを殺そうとしています」と告げた。王は穴を見ただけでも黙っていた。

またマーガンディヤーは8羽の生きた鶏を持ってきて、「大王よ、彼女らにこれを殺して自分のために料理させよ」と命じて下さい、と言った。彼女たちは殺生はできませんと断った。今度は「沙門ゴータマのために料理することを命じて下さい」と言って死んだ鶏を渡した。サーマーヴァティーは十力のために料理した。しかし王の心を乱すことはできなかった。

王は3人の王妃の住処に7日間ずつ留まっていた。王は行くところに象の好む琵琶(hatthikantaviṇā)を持っていくのが常であった。マーガンディヤーは王がサーマーヴァティーの宮殿に行くときに、歯を解毒剤で洗った1匹の黒い子蛇を琵琶の中に入れ、花輪で穴を塞いだ。そして王が行ったりきたりしているときに、花輪を抜いた。蛇が近づいてきて鎌首をもたげた。王は見て怒った。サーマーヴァティーは王が怒っているのを知って、500人の女たちに思いを与えた。「今は特別の慈遍満によって王に遍満させましょう」(odissakamettāpharaṇena rājānaṃ pharatha)と。そして自らそうした。王は弓を持ってきて弦を引き絞りと、サーマーヴァティーや女たちに向かって矢を射ようとしたが、汗を流し、身体を震わせるばかりで果たせなかった。そしてサーマーヴァティーの指示によって矢を地面に向かって放った。その瞬間、王はまるで水に入ったように衣服も髪の毛も汗びっしょりとなってサーマーヴァティーの足下に身を投げ出し、「王妃よ私を許してくれ」と言い、「自分の抛り所になってほしい」と偈を唱えた。サーマーヴァティーは「私でなく、ブッダに抛り所を求めなさい(saraṇaṃ gaccha taṃ buddhaṃ)」と偈を返した。王は世尊に帰依し、仏を上首とするサンガに7日間施食を行った。サーマーヴァティーの願いも聞き届けようとしたので、彼女は「世尊を500人の比丘とともに定期的にお招きして、説法が聞けるようにしてほしい」と言った。王は世尊に申し入れたが、世尊は「仏はいつも一箇所に往くことはできない、多くの人が望んでいるから」と答え、代わりに阿難を指名された。阿難は500人の比丘を引き連れて王宮に行き、王妃を上首とする女たちは食事を供養して法を聞いた。このような王の矢を逃れる忍耐のあり方がサーマーヴァティー優婆夷の三昧遍満の神通力である(evaṃ rañño khuppaṃ muñcituṃ avisahanabhāvo Sāmāvatīyā upāsikāya samādhivipphārā iddhi)。Paṭisambhidāmagga.-A. (pp.674~676)

- (4) 仏は俱曇弥(コーサンビー)国美音(ゴースタ)精舎にきて諸天人神龍のために説法された。時にその国の王の名をウデーナ(優填)といい、仁愛にあふれた夫人(サーマーヴァティーをさすものと思われる)があつて、その操の高さを珍として、常にひそかに恭敬していた。仏は国王及び夫人のために法を説き、2人は歓欣信解し、各々五戒を受け清信士女となった。時に吉星という名の婆羅門がいて世間に比のない美しい娘(マーガンディヤーをさすものと思われる)がいた。彼は仏のことを聞いて婚姻を申し込むが拒絶された。彼は怒って立ち去りウデーナ王の所に行き王妃にふさわしいと勧め、王は納受して第二左夫人とした。彼女は嫉妬深く、大夫人の持斎の時を見計らって王に召喚させ、命令を聞かないのに怒った王が射殺せんとしたが、矢は反転

して王に向かった。王は怖れて「何の術か」と質したのに対し、「唯事如来帰命三尊」と答えた。『法句譬喩経』（大正 04 p.603 下）

- (5) あるときウデーナ（鄢陀延）王はマーガンディヤーともう一人の妻であるサーマーヴァティー（紺容）と同座していた。王がくさめをしたとき、マーガンディヤー（無比夫人）は「南無大天、願わくは王、具寿無病ならんことを」といい、サーマーヴァティー（紺容）は「南無仏陀、願わくは王、長命無病ならんことを」といった。そこでマーガンディヤーは「サーマーヴァティーは王の食をはみつつかも仏陀を思っている」と非難した。

王は順番を決めて2人の妻のところで食事をするようになっており、その日はサーマーヴァティーの番に当たっていた。マーガンディヤーは捕鳥者に生きた鳥を捕まえさせて、王に食用にすることを勧めた。しかしサーマーヴァティーはこれを受け取らなかった。マーガンディヤーは王に、「もし仏や僧に対してなら、サーマーヴァティーは殺して供養にあてたでしょう」と讒言した。そこで王はサーマーヴァティーに仏のための食を整えることを命じた。今度はマーガンディヤーはサーマーヴァティーに死んだ鳥を与えたのでサーマーヴァティーはこれを受け取り、これを食事として準備した。王はサーマーヴァティーが受けたことを怒って矢をサーマーヴァティーに射た。サーマーヴァティーは慈定に入っていたので、王が射た矢は矢じりを巡らせて王の方に向かってきた。王がさらに射ようとするので、サーマーヴァティーは「私は不還をえて、過ちがないのであるから、王が害意をいただければ必ず重罪を招くでしょう」と言った。王は懺悔して、それ以来王はサーマーヴァティーに姉妹の相をなし、新穀新果があれば先に授け、自ら安否を尋ねた。

時に王の辺境に叛乱があり、王が出兵している間にサーマーヴァティーの住む後宮が火事になった。夫人は夜に写経していたので、樺皮・貝葉に引火したのである。それを見た人々は消火しようとしたが、マーガンディヤーの父の無憂大臣はこれを許さなかった。そこでサーマーヴァティーと500人の姪女は死んだ。王は怒って無憂を死刑に処し、マーガンディヤーを地牢内に置いた。『根本有部律』「波逸底迦 082」（大正 23 pp.891 下～892 下）

- (6) ある時ウデーナ王（ウダヤナ王）と王妃サーマーヴァティー（シャーマーヴァティー Śyāmāvati）とマーガンディヤー（アヌパマー Anupamā）とが同じ場所に居合わせ、王が嘔をしたとき、サーマーヴァティーは「仏に帰命します」と言い、マーガンディヤーは「王に帰命します」と言った。またある時マーガンディヤーは生きた雉をサーマーヴァティーに調理させようと企んで、「王のために殺生しない」と断らせ、一方殺した鳥を渡して「沙門ガウタマのためには調理する」ことを王に知らしめた。王は怒って彼女に弓を放ったが、弓は舞い戻って王の近くに落ちた。王はすっかりおとなしくなり「おまえは神女か」と聞くと、彼女は「私は世尊の声聞で不還者です」と答えた。

ある村長が反乱を起こし王が出征中に、後に残ったマーガンディヤ（マーカンディカ）はマーガンディヤーに頼まれ、サーマーヴァティーを上首とする500人の女達を焼き殺した。クツジュッタラー（クブジョウッタラー Kubjottarā）だけは排水溝か

ら脱出した。*Divyāvadana* (pp.529~533 平岡聡訳 下 pp.414~419)

- (7) ウデーナ王の左夫人のマーガンディヤー(照堂)は右夫人のサーマーヴァティー(該容)を嫉妬して、王に彼女たちは仏のところに行って情を交わしていると讒言したが、王は困惑するのみであった。そこでマーガンディヤーは齋日にサーマーヴァティーを呼び寄せるように言った。サーマーヴァティーは持齋して来なかった。王は怒って夫人を弓で射ようとしたが、矢は自分の方に還ってきた。王はびっくりして訳を問い、それから仏教に帰依するようになった。

マーガンディヤーは王が出征している間に、父の国政を預かっている吉星と計ってサーマーヴァティーと侍女たちを焼き殺した。このことが露見して王は吉星を道士であることをもって国外に追放し、マーガンディヤーを地窟に幽閉し、邪道を追放して広く仏法を弘めた。『中本起経』(大正04 p.157下~158上)

- (8) ウデーナ(優陀延)王の第一夫人はサーマーヴァティー(舎摩)といい、深く如来を信じていた。第二夫人はマーガンディヤー(帝女)と言い、常に嫉妬心を抱いていた。あるときマーガンディヤーは第一夫人が如来と非法を行っていると言ったので王は怒り、夫人に矢を射ようとした。しかし夫人は王を哀愍するがゆえに慈三昧に入ったので、矢は還ってきた。王は悔恨して仏教に帰依した。『大宝積経』巻97(大正11 p.543中)

- (9) コーサンビーのウデーナ(優填)王のサーマーヴァティー(正后)は仏に師事して預流果を得ていた。マーガンディヤー(無比)は王を惑わせて、王に矢で正后を射させるように仕向けた。しかし正后は怒ることなく、慈心をもって王にかしづいたので矢は後の周りを回って王のところに戻ってきた。王はびっくりして、それから仏に帰依するようになった。『仏説優填王経』(大正12 p.071上)

- (10) コーサンビー(橋閃彌)のウデーナ(日子)王のマーガンディヤー(無比摩建彌)女はサーマーヴァティー(舎摩嚩底)妃后を憎み嫉妬して王に妃后らが沙門と淫欲を行っていると言ったので王は怒り、サーマーヴァティー夫人を弓で殺そうとした。しかしサーマーヴァティーは慈心定に入り、矢は虚空で火焰を生じて、自分のところにめぐり還ってきた。仏が密護したのである。ウデーナ王は驚いて、それから仏に帰依するようになった。『仏説大乘日子王所問経』(大正12 p.072中~073上)

[8-3] 先にサーマーヴァティーのところでは *Udāna* がサーマーヴァティーとその侍女たちが火事で死んだとしていることを紹介したが、A文献資料の『十誦律』の〈1〉は、それをマーガンディヤーの仕業であったとしている。〈2〉は並記されているのみであるが、これはコーサンビーの破僧事件に関連するものであって、2人が対立していたということは認識されているといってよいであろう。

[8-4] B文献資料では、マーガンディヤーがウデーナ王を唆して、サーマーヴァティーを陥れようとするさまざまな悪巧みが事細かに物語られる。サーマーヴァティーなどが仏や比丘たちと情を交わしているという讒言や、鶏を王のためには料理せず仏のためには料理するというみせかけや、琵琶のなかに蛇を入れてサーマーヴァティーが王を殺そうとしているというからくりなどである。しかしすべてが失敗に帰し、はじめ仏教を理解しようとしなかった王が仏教に帰信したので、ついに後宮に火を放たせてサーマーヴァティーと侍女たちを皆

殺しにし、自らは刑死したとされている。そしてこのなかで、サーマーヴァティーが慈住第一とされる所以も語られている。

このようにこれらの物語は、マーガンディヤーのサーマーヴァティーに対する悪巧みが主テーマであって、ウデーナ王の仏教帰信は副次的に語られるに過ぎないが、ここでは王の仏教帰信はサーマーヴァティーの自覚的意志によるものではないが、サーマーヴァティーの慈住の力に王が感服したことによるとされているわけである。

[8-5] 先に紹介したウデーナ王資料では、ウデーナ王の仏教帰信はピンドーラ・バーラドヴァージャによるとしていた。いずれにしても所詮単なる説話の類いであって、信じるに足りない片づけることも可能であるが、しかしその他に決め手がない以上、一応の検討をしておく必要があるであろう。

ところでいずれの伝承にしても王は、はじめはむしろ仏教に好意を持っていなかったとされている。したがってどちらも同じ時期の出来事であって、2つのうちのどちらかを信頼するという必要はなく、2つの事柄が相まって次第に王も仏教に理解を持つようになったと考えたほうがよいかも知れない。すなわち、ゴーシタら3人の長者の招待によって釈尊はコーサンビーにおける初めての雨安居を過ごすためにやって来られ、このときスマナたちコーサンビーの他の人々も釈尊の教えに触れて仏教を信じるようになった。このようなときにクツジュッタラーも偶然の機会に釈尊の話を聞く機会を持ち、彼女によって間接的にサーマーヴァティーも仏教に誘われることになって、仏教が王室の中に入ることになった。しかしながらウデーナ王自身ははじめは仏教に無関心であって、マーガンディヤーなどの入れ知恵でむしろ反感を持っていたのであって、ピンドーラと初めて会ったときも、この時のことであつたと考えれば矛盾はないわけである。しかしながらサーマーヴァティーの慈悲の力や、ピンドーラの神通の力によって、王も次第に仏教に興味を持つようになり、そしてついには熱心な仏教信者になったというのが、もっとも蓋然性のある推測ということになるであろう。

なおそのように推測することが許されるとしても、ウデーナ王の仏教帰信の時期がいつであつたのかは問題となるであろう。クツジュッタラーとサーマーヴァティーの仏教帰信は釈尊のコーサンビー滞在中であつたとしても、ウデーナ王の帰信はそうと考えなくともよいかも知れない。上記の資料ではウデーナ王が釈尊と直接に会つたように描かれているが、釈尊はサーマーヴァティーらの指導を阿難に委ねられたとしているのであるから、あるいはそれは釈尊がコーサンビーを離れた後のことを象徴的に示すかも知れないからである。

しかしながらこのことも、他の事柄と併せて総合的に考察するために、節を改めて論じることにはしたい。

[9] 最後に、ウデーナ王の王女あるいは王妃と考えられるシュリーマティーを主な登場人物とする資料を紹介する。

[9-1] A文献資料には次のものがある。

(1) サーマーヴァティー（舎彌波提）夫人が焼け死んだときウデーナ（優填）王は悲しんだが、臣下たちが新宮を作って500人の女を住ませた。そのなかに瞿羅（ゴーシタ）居士の娘でサーマーヴァティーの妹である威徳（シュリーマティーをさすと思われる）がいて、王はともに娯樂するようになった。威徳は姉が熱心な仏教信者であつ

たので、宮中で仏と僧を供養することを王に願った。王は仏が諸比丘に王宮に入ること許されていないことを知っていたので、それが王宮でないような宮殿を造り、そこに招待した。舍利弗をはじめとする比丘らはそこに行ったが、仏は自室にとどまった。仏は「急因縁あるときには宮中に入ってよい」と定められた。『十誦律』「波夜提 082」（大正 23 p.126 上～下）

〈2〉よく妙法を敷きて大辯才ある者は善意王女（シュリーマティーをさすと思われる）である。舎衛国に住す。『阿羅漢具徳経』（大正 02 p.834 中）

[9-2] B 文献資料には次のものがある。

〈1〉ゴーシラ長者の娘として生まれたシュリーマティー (*Śrīmatī*) はたいそう美しかったので望まれてヴァツツァ王であるウデーナ (ウダヤナ) と結婚した。シュリーマティーは比丘たちに会いたがったが、王が比丘は王宮に入れないという断食してしまった。困った王は隣に住んでいるゴーシラ (ゴーシタ) の家の中庭から後宮に通じる出入口を作り、ゴーシラの家には比丘たちを食事に招待するときに会えるようにした。ある日、舍利弗を上首とする比丘サンガが招かれ、シュリーマティーに会って、説法して四諦に安住させた。 *Divyāvadāna* (pp.541~543、平岡訳 pp.431~433)

〈2〉妙音 (ゴーシタ) 長者は仏やサンガに給仕するのにいつも一人の婢を使っていた。この女は死に臨んで、仏や僧に仕えた福縁として、妙音長者の娘として、美貌にして妙容⁽¹⁾ と似た娘に生まれ、ウデーナ王 (鄢陀延王) の妃となるという願をかけた。こうして命終して妙音夫人の胎の中に受生した。誕生の時部屋に光明が満ちたので、シュリーマティー (吉祥慧 *Śrīmatī*) と名付けられた。ウデーナ王はこの女を遠くから見て、マーガンディヤー (無比) と間違え、それが縁で妻とした。シュリーマティーは後宮で仏法を聞くことを願ひ、舍利弗が派遣されたが、舍利弗は創製の戒を守り王宮の門を入らなかったので、「王の寝室に因縁を除きて、門限を過ぎて入れば波逸提」と随開された。『根本有部律』「波逸底迦 082」（大正 23 p.893 上～中）

(1) 話のすじからマーガンディヤーをさすものと考えられる。

[9-3] 上記のように、王妃はゴーシタ長者の娘であって、比丘は王の宮殿に入れないので王は王妃の希望を入れて王宮でないような宮殿を造ったこと (あるいは抜け道を造ったこと)、舍利弗が登場することなど、A 文献 B 文献ともにいくつかの情報が共通するので、同じ一つの伝承であって、A 文献の 〈1〉はその名を「威徳」として、語義からいって必ずしもシュリーマティーとは重ならないが、B 文献の名を尊重するとすれば、ウデーナ王にももう一人シュリーマティーという妃がいたということになるであろう。A 文献の 〈2〉はその名を「善意」とし、しかも「王女」とするから、これはシュリーマティーに相当しないかも知れない。

もしこれを信じるとすれば、ウデーナ王の王室にはサーマーヴァティーのほかにもう一人熱心な仏教信者がいたということになるが、いずれにしてもこの論文の主題と密接にかかわり合う人物ではない。

[10] 以上のように、コーサンビーの王室内の人物として登場するのは、ウデーナ王、サーマーヴァティー王妃、ヴァースラダッター王妃、マーガンディヤー王妃、シュリーマティー

王妃、クツジュッタラー侍女の6名である。一般にはウデーナ王にはボーディ王子という王子があったと考えられているが、上記の資料には主要人物として登場することはなく、わずかに [6-2] の B 文献資料 (2) の MN.-A. にヴァースラダッター王妃とウデーナ王の子として名前が上がるのみである。そこで果たしてボーディ王子はコーサンビーの王室に関連のある人物であったかという疑問も湧いてくるが、一般的な常識も無視することはできないので、ここで一応ボーディ王子 (Bodhirājakumāra) についての資料を調査し、考察を加えておきたい。なおボーディ王子の漢訳には菩提、菩伽がある。

[10-1] ボーディ王子に関する A 文献資料は次のとおりである。

- (1) 一時世尊はバग्ガ (Bhagga) 国スンスマーラギラ・ベーサカラ林の鹿苑に (Sumsumāragire Bhesakalāvane Migadāye) 住された。その時ボーディ王子のコーカナダ (Kokanada) と呼ばれる宮殿 (pāsāda) が建設され、ボーディ王子はサンジカープッタ青年 (Saṅjikāputta māṇava) に命じて世尊を招待した。翌朝ボーディ王子は宮殿の階段に白衣を敷いて迎えたが、世尊は白衣の上に昇らず、三度勧められて阿難を顧みた。阿難が白衣を除くよう王子に告げ、除かれてから供養をうけて、王子の象に乗って鉤を使う術に巧みなことを例にとって五精進支につき説法された。これを聞き王子は、「実に仏なるかな、実に法なるかな、実に法の妙説なるかな、夕に教示せられて朝に勝進を得、朝に教示せられて夕に勝進を得るとは」と言った。これを聞いてサンジカープッタが「『実に仏なるかな、実に法なるかな、実に法の妙説なるかな』というが、仏法僧に帰依するとは言わない」と言ったのに対し、王子は次のように答えた。「これは母より自分が親しく聞いたものである。一時世尊がコーサンビーのゴーシタ園に住されたとき、自分を懐妊した母が世尊のところに詣り、『生まれてくる子が男であっても女であっても仏法僧に帰依します、今日以後終生彼を優婆塞として受持されんことを』と申し上げた。また、かつて世尊がバग्ガ国スンスマーラギラ・ベーサカラ林の鹿苑に住された時、私の乳母が私を腰に抱いて世尊所に詣り申し上げた。『ボーディ王子は仏法僧に帰依します、今日以後終生彼を優婆塞として受持されんことを』と。このように、私は三度仏法僧に帰依します。今日以後終生わたくしを優婆塞として受持されんことを」と。MN.085 *Bodhirājakumāra-s.* (vol. II p.091)
- (2) 世尊はヴェーサーリーからバग्ガ国に向かって遊行され、バग्ガ国スンスマーラギラ・ベーサカラ林の鹿苑に住された。その時ボーディ王子のコーカナダと呼ばれる宮殿 (pāsāda) が建設され、ボーディ王子はサンジカープッタ青年に命じて世尊を招待した。ボーディ王子は宮殿の階段に白布を敷いて世尊を迎えたが、世尊は白衣の上に昇らず、三度勧められて阿難を顧みた。阿難が白衣を除くよう王子に告げ、除かれてから供養をうけ説法されてから、「布衣を踏むべからず、踏む者は悪作に墮す」と制せられた。Vinaya「小事毘度」(vol. II p.127)
- (3) その時世尊は跋耆国におられ、人間を遊行して失守摩羅山に往き恐れ村鹿野苑に住された。時に菩提王子が新殿堂を造ったので、薩閣婆羅門の子を仏所に遣わし、仏及び僧を請食に招いた。王子は種々の美食を設け殿堂を清掃し、好新衣を布いた。翌朝世尊は来られたが堂前に立って進まねず、再三の要請にも黙ったままで阿難を顧視さ

れた。阿難は仏が新衣の上を踏んで行くのを欲せざるを知り、王子に「この新衣を摂すべし」と伝え王子が衣を却けたので、仏は殿に上り座につかれた。世尊は王子に説法され、この因縁により「もし大価衣を地に布けば、上に在りて行くべからず。もし行けば法の如く治す」と定められた。『四分律』「衣毘度」（大正 22 p.857 中～下）

〈4〉 仏は婆伽国首摩羅山恐怖林に住された。その時、ボーディ（菩提）王太子はこの山に新たに講堂を建て、薩闍子摩納に命じて仏を招待した。太子は講堂の内外に雑色の衣を敷き仏を迎えたが、仏は上がられず三度勧められて阿難を顧みた。阿難が白衣を除くよう王子に告げ、除かれてから衆僧と俱に上って座についた。諸比丘は一指を以て或いは二指を以て鉢を捻んで食を受け、鉢を落として床を汚した。世尊はこれにより、「一心に食を受けんと当に学すべし」と制せられた。『五分律』「衆学法」（大正 22 p.074 中～下）

〈5〉 仏は波伽国に遊ばれ、人間教化して、失守羅の毘師藍蜜伽藍に住された。この失守羅処ではボーディ（菩伽）王子の家に新堂が完成したところで、鳩摩羅といった。王子は仏にこの新堂に初めての沙門婆羅門として入ってもらおうとして薩若瞿妬路摩牟を使いに行って招待し、堂と階に布地を敷いて荘嚴した。世尊は阿難に二度、王子をして布地を取り去るようにと指示された。その時仏は、「地の上に敷いた布の上を行ってはならない。行けば突吉羅」と定められた。『十誦律』「雑法」（大正 23 p.271 下）

〈6〉 仏が波伽国におられた時、ボーディ（菩伽）王子は仏及僧に明日食を請うた。翌朝菩伽王子の家に行き座につかれたが、その家には仏を信じない婆羅門や辺地人がいて、行食が如法でなく、半分は鉢に入れ、半分は地に置いた。比丘たちはどのように食を得ればよいのか分からず仏に伺った。仏は「草葉の上の食は食べてよい、土の付いたものは土を吹いて食べよ、土が多く付いたものは水で洗って食べてよい」と言われた。『十誦律』「雑法」（大正 23 p.273 下）

[10-2] B 文献資料には次のようなものがある。

〈1〉（仏がボーディ王子のコーカナダ宮殿に敷いた白い布に上られなかった理由として）王子には子どもがなく（aputtaka）、「もし子どもが得られるなら仏は布を踏まれるであろうし、もし得られないならば踏まないであろう」と願を掛けた。世尊は子どもは得られないと観察されたが、踏めば諸仏に願を掛けても虚しいとか、外道たちは沙門たちは敷物を破り徘徊するなどという噂がたつであろうなどと考えられて、踏まないで沈黙された。MN.-A. (vol. III pp.322~323)

〈2〉 ボーディ王子は誰のもとで象に乗り、鉤を使う術を習ったのか。父親の元においてである。父親もその父親のもとで習った。……ウデーナ王の物語が語られる（[2-2] の〈2〉参照）……

アヴァンティのチャンダバジジョータ王は、ウデーナ王のもとで象を操る技術を得ようと、作り物の象を作り、その中に兵士を入れてウデーナ王をおびき寄せて捕えた。そして自分の娘を送りだしたが、王は娘と結婚してコーサンピーに帰り、ボーディ王子を生んだ。ボーディ王子は自分の父親のもとでこの技術を習ったのである。MN.-A. (vol. III pp.324~325)

- (3) この話はボーディ王子が他に類例がない宮殿を建てたことにまつわるものである。それは殆ど空中に浮かんでいるようで、その名を赤蓮華、コーカナダといった。それが完成したとき王子は建築家に、「他にこのような宮殿を建てたことがあるか、それとも初めてか」と尋ね、建築家が「この種のものは初めてです」と答えると、王子は「誰か他の人のためにこのような宮殿を建てられないようにするには、この男を殺すか、手足を切るか、眼をえぐるのがよい」と考えた。ボーディ王子は親友のサンジカープッタ (Saṅjikāputta) の所へ行き考えを語った。サンジカープッタは建築家の才能を惜しみ、王子が殺そうとしていることを教唆した。建築家は「まだ仕上げの仕事が残っており、そのための材木が必要で、また精神集中のため食事を運ぶ妻以外は近づけないように」と王子を謀り、木造のガルダ鳥を作って妻子を収容して逃れ、ヒマラヤ地方に着地して町を創った。彼はその後木馬王 (Kaṭṭhavāhanarāja) として知られた。 *Dhammapada-A.* (vol. III p.134~135、Burlingame 訳 vol. I pp.348~350)
- (4) この本生物語は、仏がバツガ国のスンスマーラギラの付近のベーサカラー林中におられた時に、ボーディ王子について話されたものである。ボーディ王子というのは、ウデーナ王の子であって、スンスマーラギラに住んでいて、1人の大工にコーカナダという宮殿を造らせた。王子は「他の国王にもこのような宮殿をつくるかも知れない」と考えて大工の目をえぐりとった。仏は王子のこのように残忍であった過去の因縁を語られた。 *Jātaka 353 Dhonasāka-j.* (vol. III p.157)
- (5) その時世尊は室収摩羅山恐畏林鹿園に住された。時に菩提王子は鳥鳴楼を造り、完成式に仏及び僧を招待した。その時陂波難陀は手で以て楼の柱を打ち、楼を震動させた。供養人に「どうしてこんなことをするのか」と言われ、「貧寒人菩提、これに愛著心を起こし命終の後どこに墮ちるのか」と答えたので、王子は大変機嫌を損ねた。この因縁により、仏は「苾芻は手を以て柱を打つべからず、違反すれば越法罪を得る」と制された。『根本有部律』「雑事」(大正 24 p.208 中~下)
- (6) その時仏は江猪山恐畏之處施鹿林におられた。菩提王子は仏及び僧を請じ、妙花楼に於いて供養を設け楼上に上畳を敷いた。世尊が来られてその衣で覆われたのを見られ、足で踏まれなかったので、王子が敷衣を除くと前進された。外道がこれを聞き「沙門喬答摩は未だ供養に堪えられないので敷畳を踏まなかった」と言うのを知り、仏は諸苾芻に言われた、「もし信心ある婆羅門、長者、居士が道路処において上妙衣を敷いて『願わくは慈悲をもって踏んでください』と請うならば、外道の我慢心を伏せんと欲するが故に、諸行無常想を作して踏みなさい」と。『根本有部律』「雑事」(大正 24 p.223 下)

[10-3] 前項までに紹介してきたように、コーサンビーの王室の人脈に関連する物語にはボーディ王子が登場する場面はなく、仏典におけるボーディ王子の伝承は今紹介したように、A、B 資料ともにほとんど全部が王子がスンスマーラギラに建てたコーカナダと呼ばれる宮殿に関するもののみである。したがってボーディ王子がコーサンビーの王室に関係する人物であるかどうかは確認しがたいのであるが、A 文献資料のなかの〈1〉に、「一時世尊がコーサンビーのゴーシタ園に住されたとき、自分を懐妊した母が世尊のところに詣り、『生まれ

てくる子が男であっても女であっても仏法僧に帰依します、今日以後終生彼を優婆塞として受持されんことを』と申し上げた」とするので、ボーディ王子はウデーナ王の子というB文献の伝承が生じたのであろう。しかし厳密に言えば、この経典はボーディ王子をウデーナ王の子と明示しているわけではない。しかも続く文章では「かつて世尊がバグガ国スンスマラギラ・ベーサカラ林の鹿苑に住された時、私の乳母が私を抱いて世尊所に詣り申し上げた、『ボーディ王子は仏法僧に帰依します、今日以後終生彼を優婆塞として受持されんことを』と」とされているから、ボーディ王子は青年期に達してからバグガ国に移ったのではなく、幼少期から住していたものと考えられ、なぜ懐胎した母親がコーサンビーにいたのかという疑問が生じる。しかもこの部分はMN.085 *Bodhirājakumāra-s.*にしかない情報である。

このようにボーディ王子がウデーナ王の王子であったという明確な証拠はないのであるが、あるいはボーディ王子が象に乗り、鉤を使う技術を持っていたということが、ウデーナ王と結びつけることになったのかも知れない。[2]において紹介したように、ウデーナ王は象を操る技術を持っていたことで有名だからである。

しかしながら実はウデーナ王の持つ象の技術に言及するA文献はなく、どうもこれはB文献において付与されたウデーナ王の人物像であったようである。ということになると、A文献の範囲で考えると、ボーディ王子の象を操る技術がウデーナ王に結びつけたのではなく、先のボーディ王子を懐胎した母親がコーサンビーにおいて釈尊に会ったという記事がボーディ王子をウデーナ王に結びつけたと解釈せざるを得ない。そしてウデーナ王の象を操る技術はむしろその後で、ボーディ王子がそれを持っていたのは父親が同じ技術を持っていたからだというふうに結びつけられたのかもしれない。

[10-4] ところでバグガ国がどこにあったのかは明確ではない。MN.085 *Bodhirājakumāra-s.*ではコーサンビーに近いと解釈されるであろうし、『根本有部律』「飲酒学処79」（大正23 p.857上）は「橋閃毘の失収摩羅山」とするから、これはスンスマラギラがコーサンビーにあったと認識されているわけである。しかし本「モノグラフ」第6号に掲載した岩井昌悟研究分担者の【論文5】において検討されているごとく、*Vinaya Khuddakavatthu-kkhandhaka* (vol. II p.127)では、「世尊は随意の間ヴェーサーリーに住された後にバグガ国に向かって遊行され、スンスマラギラ・ベーサカラ林・鹿野苑に住された」とされ、また続くところでは(vol. II p.129)では「世尊は随意の間バグガ国に住された後に舎衛城に向かわれ祇園精舎に住された」とされ、AN.008-003-030 (vol. IV p.228)では「釈尊がバグガ国からチェーティ国に居るアヌルダのもとに来る」とされているから、バグガ国はヴェーサーリー、舎衛城、チェーティ国、コーサンビーを結ぶ範囲の中のコーサンビーに近い一地方と推測するのが無難であろう⁽¹⁾。そしてもしボーディ王子がウデーナ王の王子であって、しかもヴァンサ国の王子としてバグガ国に住んでいたとすれば、バグガ国はヴァンサ国の属国的な国であったということになる。

(1) 岩井昌悟「原始仏教聖典資料に記された釈尊の雨安居地と後世の雨安居地伝承」（本モノグラフNo.6【論文5】 p.109）なお、釈尊がこの地で説かれた経典についても、当該論文p.108参照

[10-5] このようにボーディ王子がどういう人物であったかについてはわからないことが多いが、このこと自体は釈尊の生涯の事績や釈尊教団史の年代算定に関係するところはない。

しかし注目すべきは、ボーディ王子の母親（B文献ではヴァースラダッター）⁽¹⁾ が王子を懐妊しているとき、釈尊はコーサンビーに滞在されていたということであり、生まれてから乳母を必要とし、腰に抱かれているような状態の幼児になったときには釈尊はバグガ国におられ、そして王子が成人してバグガ国を統治しており、B文献によれば王子に子どもができるようになったときにも、バグガ国に住されていたということである。

王子が成人し、国を統治して、子どもを持つようになるという年齢は早く見積もっても15歳は下回らないであろう。そしてB文献によれば子どもができるかどうかを気にする年齢に達していたとすれば、少なくとも20歳には達していたとしなければならないであろう。したがってコーカナダ宮殿のエピソードが王子の20歳のころであったとするなら、懐胎は20年前ということになり、もしそうだとすれば、王子を懐胎した母親が釈尊に会った時期は宮殿の建設よりも20年前ということになる。そして王子が20歳ころになったときに釈尊はバグガ国を訪れているのであるから、入滅前のことでなければならぬが、釈尊が満80歳を迎えられたのは入滅の前にヴェーサーリーの近郊の竹林村で雨安居に入られた時であり、われわれはその前の年の79歳を迎えられた雨安居は王舎城で過ごされたと考えているから⁽²⁾、王舎城とコーサンビーの距離から見ても、それは少なくとも釈尊78歳の年以前でなければならぬことになる。そうすると懐胎した王子の母親がコーサンビーで釈尊に会ったのは、その20年前の釈尊58歳よりも前ということになる。

一方釈尊が初めてコーサンビーを訪れられたのは、すでに検討したように少なくとも釈尊が舎衛城に行かれたよりも以降のことで、おそらく阿難が秘書室長に就任した成道20年以降のことであったと考えられる。それは釈尊55歳の時であるから、王子の母親が釈尊に会ったのは釈尊の55歳から58歳までの間ということになる。ただしそれがより厳密にはいつのことで、またこれは釈尊の初めてのコーサンビー訪問の時であったのか、それともそれとは別の時であったのか、というようなことは別に検討されなければならない。

またこれと関連するのであるが、果たして釈尊は何回コーサンビーを訪問されたかということも問題となろう。可能性として最大限にあげてみれば、ゴーシタ園が建設されたとき、ボーディ王子を懐妊した母親が釈尊に会ったとき、もしバグガ国がコーサンビーに近く、バグガ国に来られたときにはコーサンビーにも立ち寄られたであろうと考えれば、ボーディ王子の乳母が釈尊とバグガ国で会ったとき、そしてコーカナダ宮殿が落成したときの4度であって、その外にも後に検討するように、コーサンビーのサンガに破僧が起こったときにも釈尊は確実にコーサンビーに滞在されていたのであるし、サーガタが龍を退治して不飲酒戒が制定されたときにもおられたであろうから、これらとの関連も検討しなければならない。

このようにこの簡単な記述は、実は釈尊の生涯と教団史の年代推定に密接に関連するから、これについては節を改めて論じることにはしたい。またその際、この情報はパーリにしかなく、漢訳にこれと対応する経典は存在しないので、A文献資料とはいいながら、資料水準は第2次であるということも忘れてはならないであろう。

(1) 水野弘元氏はボーディ王子の母親をサーマーヴァティーであると推定されている。「初期仏教の印度に於ける流通分布について」（『仏教研究』7巻4号、昭和19年2月）

(2) 釈尊最後の雨安居はヴェーサーリーの近くの竹林村で過ごされ、その時に80歳を迎えられたことは『涅槃経』によって知られる。そしてこの『涅槃経』は王舎城の靈鷲山においてサ

ンガが繁栄して衰退しないための「七不退法」を説かれるところから始まる。本モノグラフに掲載した【論文16】に書いたように、釈尊の遊行は2ヶ月を越えることはなく、しかも老齢であられたことを考えると、その前年の雨安居はこの王舎城でなされたと推測するのである。これは『増一阿含』26-9（大正2 p.639 上以下）によっても知られる。この経は舍利弗・目連が世尊の入滅に先立って滅度を取ったことが主題であるが、それは世尊や舍利弗目連が羅闍城で夏坐を終わった後のことで、「釈迦文仏は久しく世にあらず、年80に向かう」とされる時であったとされているからである。

[10-6] なお『雑宝蔵経』巻2（大正4 p.459 上～下）に、優填王の王子であるとする娑羅那の物語があるので、参考のために紹介しておく。

むかし優填王の王子である娑羅那は仏教において出家して頭陀苦行していた。あるとき彼が山林の樹下で坐禅しているとき、悪生王が園遊に来て眠ってしまった。王の姪女たちは遊んでいる間に娑羅那が坐禅しているのに会い、説法を聞いた。目覚めた王がそれを見て、あなたは悟りを得ているのか、不浄観を得ているのかと尋ね、比丘がいずれも得ていないというので、それなのに女とともに坐すのかと怒って打ち据えた。娑羅那は自分は王子であって、王位を継げば兵力においても悪生王に引けは取らないのにと、師の迦旃延に還俗を申し入れた。迦旃延は一晩待てと引き止めた。そして娑羅那に夢を見させた。夢で娑羅那は還俗して家に還ったが父王はすでに崩御していて、王位を継いで兵を集めて悪生王と闘ったが敗れ、捕虜になって今にも殺されようとして目が覚めた。そして師に煩惱の賊を討たずして、どうして悪生王を討とうとするのかと諭されて、心意解けて預流果を得、さらに精進して阿羅漢果を得た。

この話は、ウデーナ王とピンドーラ・バーラドヴァージャの話に類似する部分もあるが、しかし基本的な構造は異なるので、それを下敷きにして作られたウデーナ王の王室とはまったく関係のない話であろう。なお悪生王は[2]のところで紹介したいくつかの文献にピンピサーラ・ウデーナ・優陀延王と併称される五王のなかの1人としてあげられる。